れた。自分で言ふのはをかしいが、學校での成績は良かつた。しかし、友だちの邪氣なき嘲笑は、身にしみ〴〵と辛く覺えた。

　か〻る間も、母は深く私の身上を氣遣つてくれた。學校でも良い教師へ頼んで、何かと勉學の便宜をはかつてくれた。

　小學校を出ると、私はすぐと猪苗代小學校の助教員になつた。俸給も月三圓かそこらであつた。家の生計も貧しかつたが、母は私の給料に手を著けるやうな事はなかつた。私は給料を丹念に貯へて、日本外史を買つて讀んだりした。その時は母も驚き、且共共に喜んでくれたのを覺えてゐる。猪苗代の小學校長は即ち小林榮氏で、私は後々もこの人に取立てられたのである。

　或日、私は若松にドクトル渡邊鼎氏の門を叩いた。いかにもして手指の切開を行つてもらはうとした。渡邊氏は私の手を診察すると、

「なあに、手術さへすればすぐ治るよ。」

と言はれた。この一語、私は天の福音として聞いた。而も手術の結果は果して良好で、從來は物もつかむ事が出來なかつたのが、りつぱに役立つやうになつた。私は歡喜にふるへた。希望の光明は瞬間に私の胸を明るくした。

「よし、おれも一つ醫者になつて見せる。」

　私は身ぶるひしてつぶやくのであつた。その時、私は十六歳であつた。

　それから私は渡邊氏の藥局生として、夜の目も寢ずに醫學の研究にか〻つた。傍ら語學の勉强を始めて、英、佛、獨の各國語を殆ど獨學で習得した。かやうにして私は渡邊氏に二箇年身を寄せてゐた。この間の渡邊氏の親切、小林氏の指導を忘れる事は出來ない。

　私が愈〻東京へ出る決心をうち明けた時は、小林校長も、渡邊ドクトルも、翁島の母親も、心から賛成してくれた。渡邊氏は知人血脇氏に宛て〻紹介狀を認めてくれた。同級生の誰彼も寄附金を募つてくれた。小林氏も身に不相應な餞別を

祝つてくれた。

かくて私は故郷の山河を後にして、明治二十九年四月、始めて花咲く都の土を踏んだ。血脇氏は義侠に富んだ人で、渡邊氏の紹介狀を懐にしたこの一介の田舍書生を、快く引受けて玄關番にしてくれた。爾後、私は血脇氏の指導の下に研究の歩を進めて、その年の十月には、前期の免狀を得、翌年十一月には後期の試驗に及第した。それが學術と實地と一度に及第したのであつた。續いて血脇氏の口添で順天堂醫院の助手となり、更に傳染病研究所へ入つたのは明治三十一年の五月であつた。翌年には海港檢疫官補として横濱檢疫所へ行つた。支那に渡つたのはその十一月で、八九箇月滯在して、愈〻三十三年十二月、渡米の途に就いた。渡航費に就いても、血脇氏に一方ならぬ世話になつた。

廣い希望に滿ちた世界。そのアメリカ大陸に渡つて、私はまづペンシルバニヤ大學へ行つた。其所の圖書館に入つて、二三箇月を一心不亂に讀書した。やがて

一つの論文を書いて見た。それが端なくも大學教授たちの認むるところとなつて、同大學の病理學教室の助手となる事が出來た。偶〻ロックフェラー研究所長フレキシナー博士の肝煎で、蛇毒の研究を以てカーネギー研究所に入り、英、獨、佛三國を經て歸米後、三十七年愈〻ロックフェラー研究所に入所し、七人しかないメンバーの一人に推された。爾後今日まで其所の仕事に從ひ、自分の研究を續けてゐるのである。

世間の人はよく言ふ。

「野口は海外に渡つてから、非常に苦心をして、今日の位置と名譽とを得たのである。」

と。しかしながら、私は決して格段の苦心も努力もした覺えはない。私はたゞ樂しんで學んだのみで、今日あるを得たのである。

「あの時はさぞ苦しかつたらう。」

「さぞつらかつたらう。」

などと、よく人が言ふ。成程著る物がなくて、人の集る席へも出られなかつた事がある。食ふに困つた事もある。しかし私は心から「つらい」と思つた事はない。何時も自分の位置と境遇とに於ける正當の仕事をして來た。

「今度こそ最後のどんづまりだ。」

と觀念しかける時に、何時も義俠な人が現れたり、または境遇がひらけたりして、行手に榮ある光明を望む事が出來たのである。

世間を見ると、自分の位置に適應するやうにと働く人がある。待遇が惡いからと言つて、最善を盡さぬ者がある。しかし、私はそれと反對だ。番頭なら番頭としての自分の職責を果すべく、官吏なら官吏として自己の良心にやましからぬ勤勢をなすべく、學生ならば學生としての本務をあくまでも盡さねばならない。これ等は我が日本の學生諸君が、くれぐれも今から心がけて置かねばならぬところであらう。（野口英世）

孝養の心ふかく至れる者は、聲なきに聽き、形なきに視て、意にさきだち、志をうくと、禮の教に見えたり。親の心にきざせる事、いまだ聲にも形にも顯はれぬさきに、之を視聽く樣にさとり得て、其の意にさきだちてかなへ、其の志をうけて行ふ。

中村惕齋

妹千代に與ふ（安政六年四月十三日）

此の間は御文下され、観音さまの御せん米、三日のうち精進にていたゞき候様との御事、御深切の御志感じ入り申候。精進・潔齋などは隨分心の堅まり候ものにて宜しき事と存候に付、拙者も二月廿五日より三月晦日まで、少々志の候へば、酒肴ども一向食べ申さず、その間一度靈神様御祭のもの頂戴致し候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にも之なく、御深切の事に候へば、相果し度存候へども、當所にてはあたりまへの精進の外に、又精進と申候うては、連中又は番人ども、何故かと怪しみ尋ね候に付、それをそれと相答へ候事、面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に頂き申候。

抑、観音信仰せよとの事は定めて禍をよけ候爲にあるべく、是には大きに論ある事に候へば、委細申し進ずべく候。（中略）法華經第二十五の巻、普門品と申す篇に、悉く観音力と申す事高大に陳べてこれあり候。大意は観音を念じ候へば、縄目に懸り候へば忽ちぶつぶつと縄が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠・鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんじに折れるなど申してこれあり候。是は、拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人は是よりあり難き事はないとて信仰するも無理はなく候。

さりながら佛の教は奇妙な仕懸にて、大乘・小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乘にて申候へば、観音は右の經文の通りのものと心得たものに信仰さする事に御座候。是は人に信を起さする爲なり。信を起さするとは、一心にあり難い事じゃとのみ思ひ込み、餘念他慮なき事にて一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりさへすれば、何事に臨み候ても、ちつとも頓著はなく、縄目も人屋も首の座も平氣になれ候か

ら、世の中に、如何に難題苦患の候ても、それに退轉して、不忠・不孝・無禮・無道等仕る氣遣はない。されど初から凡夫に、一心不亂じやの、不退轉じやのと申し聞かせても、さつぱり耳に入らぬもの故に、かりに觀音樣をこしらへて、人の信を起させ候敎に御座候。これを方便とも申候。（中略）

扨又大乘と申し候時は、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候ても、立身出世など申す事には御座なく候。その初めは釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時から感の强き人にて、老人を見ては吾が身も往くさきは老人にならうかと悲しみ、死人を見ては吾が身も往くさきは死なうかと悲しみ、蟲けらの死んだの、草木の枯れたのまでに悲みを起し、是非に生老病死が此の世の習ならば、この世を出ねばすまぬと志を立て候て、年二十五の時、位を棄てて山へ入り、右の生老病死を免がれる修行をしに參られ候。さ候て三十出山とて、僅か五年の間に生老病死を免がれる事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つ

て出て來て、それから世の人を敎化せられた。是が出世法じや。故に出世せねば濟世が出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即ち此の世の人を濟度する事に御座候。さてその死なぬと申すは、近く申さば、釋迦の、孔子のと申す御方々は、今日まで生きて御座る故、人が尊みもすれば有難がりもする。恐れもする。果して死なぬではないか。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前に申す觀音經のとほりではござらぬか。楠木正成公じやの、大石良雄じやのと申す人々は、刄物に身を失はれ候へども、今以て生きてござる。すなはち刀のちんじに折れた證據でござる。

扨又「禍福繩の如し。」といふ事を御悟りあるが宜しく候。禍は福の種、福は禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者なんど、人屋にて死に候へば、禍のやうなものに候へども、また一方には學問も出來、己の爲、人の爲、後の世へも殘り、かつ〳〵死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、福この上もない事に候。人

屋を出で候へば、また如何なる禍の來ようやら知れ申さず候。勿論その禍の中には、また福も交り候へども、所詮一生の間難儀さへすれば、先の福があるなり。何の效驗もない事に、觀音へ賴みて福を求むるやうの事は必ず〳〵無益に存候。尤も右の通りに申候へば、身勝手な申分、不孝な申分とも御存じがあらう。こゝに又論がある。易の道は滿盈と申す事を大に嫌ふなり。御互に七人兄弟中に、拙者は罪人、芳は夭折、敏は啞子、ぶざまの惡いやうなものなれど、又あと四人は何れもかなりに世を渡られ、特に兄樣・そもじ・小田村は兩人づつも子供があれば、不足は申されぬ。世の中の六七人も兄弟のある家を見較べよ。これ程にも參らぬ家は多いもの。近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟の內にはぶざまの惡い人も隨分あるもの。然れば父母兄弟の代りに、拙者・芳・敏の三人が禍をかるう(負う)たと御思ひ候へば、父母樣の御心も濟める譯では御座らぬか。かつ杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却つて杉が氣遣ひなものじやないか。拙者身の上は、前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分あるが、杉は今では御父子とも御役にて何も不足のない中なれば、子供等がいつもこのやうなものと思ひて、昔山宅にて父樣母樣の晝夜御苦勞なされた事を話して聞かせても、眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事を、とくと手を組んで案じて見やれ。氣遣ひなものではないか。

去年も端午の客の多いのに、人はめでたしめでたしと嬉し顏すれど、拙者はどうも先の先が氣遣ひでたまらんから、始終稽古場へ屆んで、人の知らぬ處では獨り落淚した程の事であつた。若しや、萬一小太郎でも父祖に似ぬやうな事があつたら、杉の家も危い危い。父母樣の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでじや。小田村でさへ、山宅の事はよくは覺えまい。まして久坂なんどは尙以ての事。されば拙者の氣遣ひに觀音樣を念ずるよりは、兄弟甥姪の間へ「樂が苦の種、福は禍の本。」と申す事を、とくと申して聞かせる方が肝要じや。

そして又一つ、拙者不孝ながら孝に當る事がある。兄弟の内に一人でもぶざまの悪い人があると、あとの兄弟も自然と心が和いで、孝行でもするやうになる。兄弟も睦まじくなるものじや。それで是からは拙者は、兄弟の代りに此の世の禍を受合ふから、兄弟中は拙者の代りに、父母へ孝行してくれるがよい。左様あればつゞまるところ、兄弟中皆よくなりて、果ては父母様の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、子孫の爲是程めでたき事はないではないか。よく〳〵御勸辨候て、小田村・久坂なんどへも此の文御見せ、佛法信仰はよい事じやが、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、折々御見候へかし。心學本に、

長閑さよ　ねがひなき身の　神まうで

神へ願ふよりは身で行ふがよろしく候。（十三日した〻む）

（吉田松陰書翰ニ依ル）

太田垣蓮月

太田垣蓮月の前半生は誠に悲慘なものであつた。蓮月自身がその履歴を書いた物に、

「父は因幡の國の人、太田垣光古と言へり。故ありて都東山に住む。その頃出生、名を誠とよぶ。母は早う亡くなりて、父にはぐゝまれて人となる。三十餘りにて夫も子もなくなりて、

常ならぬ世をうきものと三つぐりのひとりのこりてものをこそ思へ

やがて父のもとにありて、四十餘りにおくれて、

たらちねの親のこひしきあまりには墓にねをのみなきくらしつゝ

この近き所に居らばやと思へど、山の上にて人の住むべき所にもあらねば、泣

く〲神樂岡ざきに移りぬ。もとより貧しき身にてせんかたなく、土もて急須といふ物を作る。いとてづゝにて、形ふつゝかなり。ゑりたる歌も、唯すきにて詠むとはすれど、昔よりいとまなくいやしき身にて、よき大人によりてまなぶ事をせざりければ、人の口眞似にて、片言のみなり。

手すさびのはかなき物をもちいでてうるまのいちに立つぞわびしき」

とあるのによると、幼くて母に別れ、長じて夫をもち子をもまうけたが、その夫にも子にも三十餘歳の頃先立たれ、父と二人ぎりのわびしい暮しを續けてゐた。しかし、それも僅か十年程の短い間で、父にも死なれてしまひ、全くの孤獨な貧生活に陷り、其所で始めて生涯の大轉機に立つ事になつたと言ふのである。

蓮月は最初自分の最も得意とした碁の師匠をしようかと思つた。しかし、それは多くは男相手の事であるのでやめた。次に和歌の師匠を志した。しかし、それもやはり多くは男性を相手としなければならぬ事なのでやめて、最後に或人の勸めるまゝに陶器を作り、それをひさぐ事によつて、細々ながら活計を立てて行かうと決心したのであると言はれてゐる。

それにしても、漸く四十を出たばかりの尼僧姿の才色すぐれた女性が、手づから雅趣ある陶器を作つて賣る店を出し、しかもその陶器には特色のある美しい文字で、才氣の溢れた和歌が書かれたり、彫られたりしてゐるのであるから、どうして世人の注意を引かないでおかう。かくして蓮月の歌が評判になり、蓮月の書が評判になり、蓮月燒の名が高くなつた。

一切を佛の前に捧げて、ひたすら布施にのみよつて、自己を生かして行くといふ佛者の生活には、無論尊さがある。しかし、蓮月の樣に魂は佛に捧げながらも、なほ且自己を生かす爲に俗人の營を續けて行つた生活にも、私たちは稀有な尊さを認めずにはゐられない。蓮月が佛門に入つたのは、決して衆生の濟度が目的ではなかつた。かの女は唯かの女一人の救の爲にのみ佛にすがつたのである。衆生

の濟度を目的としたり、救世の大願を抱いたりする様な心持は、寸毫も蓮月にはなかつた。さうした大それた願や、さうした思ひあがつた心は、塵程も蓮月にはなかつた。終始一貫かの女の求めた所のものは、唯自分一人の「救はれ」であつた。この謙虚さ、つゝましやかさは、私たちをして、一層蓮月その人を懐かしく思はせるのである。

しかも蓮月の日常生活は、一衣一鉢の雲水生活のそれの様に、簡素至極なものであつたらしい。随つて當時もてはやされた蓮月の物質的收入をもつてしては、餘つて／＼困つた程であつたに相違ない。蓮月はそれ等の一切を喜捨した。貧しい人々の爲に、または世の爲になる様々な事業の爲に、蓮月はすべてを投出して、毫も顧みなかつた。蓮月が生涯に行つた慈善事業や公共事業は、巨萬の富を擁する人々といへども遠く及ばぬ所であつたといふ。しかも蓮月自身に取つては、それは大した事ではなかつたであらう。寧ろ物を持つてゐる事の方が、かの女には堪へられない煩であつたであらう。随つて他を救ふ事よりも、自らをして常に無一物の境涯に置く事の方が、寧ろかの女に取つては先に立つ求めであつたであらう。そして其所に限りない豊かさがあり、無上の安らかさがあつたであらう。

様々な外的及び内的變遷を經て、蓮月が上述のやうな生活に徹底する事が出來た頃は、國史上空前の大動亂の起りつゝあつた時代であり、しかもかの女の住んでゐた京都が、何と言つてもその大旋風の中心であつた。

勤王佐幕何れもの勇士たちが、續々として京都に集つて來た當時の有様は、書物の上で讀んだだけでも、今日なほ血湧き肉躍る感がある。ましてその渦中に住んでゐたその當時の都人の心持は、それこそ文字通りに戰々兢々であつたに相違ない。

世の中騷がしかりける頃

夢の世と思ひすつれど胸に手をおきてねし夜のこゝちこそすれ

と蓮月は歌つてゐるが、いかにもそれは實感であつた事と思はれる。なほ

伏見よりあなたにて、人あまたうたれたりと、人の語るを聞きて

きくまゝに袖こそぬるれ路のべにさらすかばねは誰が子なるなん

かういふ歌もある。

さうした中にあつて、次の樣な蓮月の逸話が語り傳へられてゐる。それは、かの明治戊辰の役のをり、有栖川熾仁親王を征討總督宮に戴き、西郷隆盛を總參謀とした官軍が、堂々として京都を繰出した時の事であつた。

三條大橋詰にそれを見物してゐた群集の中から、突如として一人の老尼僧が總參謀西郷隆盛の馬前に立現れ、悠揚とした態度で、「これを。」と言つて、一葉の短册を差出した。そして西郷の傍にゐた一人の兵士がそれを受取つて、西郷に渡すのを見屆けるや否や、その老尼僧は再び群集の中へ紛れこんでしまつた。

その老尼僧が即ち蓮月で、短册には次の樣な歌が書かれてあつた。

うつ人もうたるゝ人も心せよおなじ御國の御民ならずや

感激性に富んだ西郷隆盛は、この一首の歌にすつかり感じ入つてしまつた。そしてそのをりの西郷の感激が、後日に於ける山岡鐵舟や勝海舟との折衝に、深甚な影響を與へたといふ事である。蓮月その人の見識の高さと、その同胞愛の博さとは全く驚歎に値する。

しかし、かうした高い見地から、またかうした博大な同胞愛をもつて、時勢の推移に深く心を寄せてゐたにも拘らず、蓮月は當時或種の人々から、徒に勤王黨にのみ身方する者と見られ、その爲に佐幕黨の一味から、怖るべき迫害をさへも蒙らうとした事があると傳へられてゐる。尤も蓮月の交つてゐた人々の中には、梅田雲濱とか、梁川星巖とか言つたやうな勤王の志士が少くなかつたから、蓮月が世間からさう見られるのも無理はなかつた。しかし、蓮月の本當の心持が、さうした差別境を超越した博い同胞愛に基づいたものであつた事は疑を容れない。

また、それであつたればこそ、あの樣な我が國の歷史上空前の大變動期とも言ふべき時代に、しかも、その中心地であつた都に住みながらも、なほ且あの樣な靜かな、清い心をもつて生活する事が出來たのである。

この時勢に對して無關心どころか、寧ろ積極的な關心をもちながらも、しかも、あのやうな稀有な清閑な生涯を送る事が出來た所に、私は蓮月の本當の偉さがあるのだと思ふ。それであればこそ、當時動亂の渦中にあつた人々にさへも、蓮月の庵は有難くも尊い魂の休息所として懷かしまれ、慕はれたのであらう。其所にあの時代に於ける蓮月といふ一個の人物の存在の最大價値と意義とがあつた。蓮月の讚美者は、徒にかの女を女丈夫あつかひのみしないで、何よりも先づ、この一點に著目しなくてはならぬのではなからうか。（相馬御風）

奧村五百子

「半襟一かけを節約せよ。」と、東京九段坂下の街頭で叫んだ一女性があつた。この叫は、やがて百數十萬人の日本女性の大團結を作る第一聲となり、今日の愛國婦人會が生れたのである。九州唐津高德寺の娘奧村五百子こそ、實にこの生みの母である。

五百子は物騒な明治維新の際に、父了寛の爲、編笠に朱鞘の大小、義經袴に草鞋穿といふ男裝で、長州の志士高杉晉作の許へ使した事もあつた。また筑前の女傑野村望東尼や、西郷吉之助とも、國事を談じた事があつた。二十二歲で同藩同宗の僧に嫁いだが死別れ、後水戸藩士鯉淵某と結婚して子まで擧げ、賃仕事などして一家を支へてゐたが、感ずる所があり、斷髮して夫と別れ、國事に奔走する

やうになつた。

國會開設最初の選擧運動に參加して、壯士の白刄を尻目に、候補者天野爲之の危急を救つた事もあれば、鄕土の爲、鐵道敷設や、開港貿易に奔走した事もあつた。日清戰爭後は五百子一流の植民政策を斷行し、朝鮮光州に日本村を建設して實業學校を建てた。蠶業教師、劍客、大工、左官、洗濯婆さんなどを百名から移住させて、土地開拓と農事の改良とを圖つた。この間樣々な艱難に遭遇したが、少しも撓まず、貧困と迫害と戰ひ續けた。

明治三十三年南支那を視察し、一旦歸朝したが、義和團事件が勃發したので、東本願寺の慰問使と共に支那に赴き、天津、北京の間に苦難の旅を續けて、親しく日本の兵士を慰問した。丘の上で「日本萬歲――」と叫んだ女の化物を見たといふ噂が兵士の間に傳はつたのは、一行が北京に到著した夕方の事であつた。この時の兵士の辛勞を見聞して、「女性は家の留守ばかりではない、國家の爲出征した兵士の留守も臺所も守らねばならぬ。」と決意したのであつた。

「半襟一かけを節約して醵金せよ。」といふ叫は、全國の女性總動員の共鳴を得て、遂に愛國婦人會の結成となり、出征兵の家族の爲、傷病兵の爲、戰歿兵士の爲、溫い扶助の手を加へる樣になつた。五百子の半襟一かけ演說は、全國の津々浦々に及んだ。

日露戰爭に際會して、愛國婦人會は愈々盛大になり、活動は益々目覺しくなつた。五百子は袴を穿き、草鞋を穿いて、滿洲の野に同胞を慰問し、戰死者の靈を弔つた。旅順の二百三高地では、前から引かれ、後から押されて頂上を究め、墓標の前で讀經回向した。

滿洲各地を巡回慰問してゐるうち、持病の胃腸病が再發して、やつと東京に歸つたが、歸るや否や、病を推して、九段偕行社で巡回慰問報告會を開き、火のやうな辯舌で一座を感動させた。

明治三十九年十一月、病氣の爲、愛國婦人會本部から隱退する事になり、宮殿下台臨のもとに盛大な送別會が開かれた。五百子は近衞篤麿公から戴いた緋色の地に金絲の菊模樣のうちかけ、白羽二重の袷、錦の袋に入れた短劍を帶して列席した。その席上、一生の思出にと、謠曲船辨慶の一節を謠ひつゝ、日の丸の扇をかざして一さし舞つた。

明治四十年二月七日、京都帝國大學附屬病院で死去したが、臨終まで口のうちで念佛を唱へ續けて、片手を胸に合掌の形をしてゐた。

五百子は一面極めて男性的であつたが、君國の爲、思想界の爲、軍人遺族の爲、孝子節婦の爲には、何時も涙もろい女性としての半面をもつてゐた。

東京九段坂下愛國婦人會の廣場に立つ切髮被布姿のかの女の銅像は、年と共に榮え行く生みの子愛國婦人會の成長を、表し得ぬ微笑を含んで、何時までも、何時までも、見守り續けて行くであらう。（小野賢一郎）

佐藤つる

佐藤つるは岡山縣後月（しつき）郡出部（いづべ）村の人なり。幼くして父をうしなひければ、母・姉と共に世を送りけり。素より貧しき家なれば、母は二人の女を育てんとて、人に傭はれなどして、辛うじて年月を經にしが、憂苦のあまり遂に精神の病に罹りぬ。姉なる子は愚かにて物の理を辨へず。つるは時にわづかに七歲なりしが、姉を勵ましつゝ、共に母の病をいたはりけり。されど生計の道を得る事難く、一家殆ど餓に迫るばかりなりき。たま〳〵憐みて糧を與ふるものあれば、つるは喜びて之を受け、先づ母に捧げ、次に姉に進め、なほ餘あれば自ら餓を支へけり。

後に母の病やゝ癒えて、姉は近村の人に嫁ぎければ、今はつる一人して母を養ひ、人の畑を借りて耕し、朝は夙に出で行き、夜は晩く歸り、風をも雨をも厭は

ず、男子に劣らず働きけるが、畑に出たる時も、時々は小走りして家に歸り、母の顏色を伺ひけり。天氣暖かなる日などは、前のふごに母を乘せ、後のに鋤・鍬の類を載せて、弱き肩に擔ひもて行き、母をば田の畔或は樹の蔭に憩はせ、己れ其の傍に鍬を執りて、母の心を慰めけり。

つるは平生、麁衣・惡食にあまんじ、蓬髮に櫛をだに著けざれども、母の好むものは、なにくれとなく求めて得させけり。母、年いたく老いて、夜、眠にえ就かぬを、つるは枕邊に侍り、或は背を撫で、或は肩を揉みなどして、母の眠るを待ち、さて、細き燈のもとに綿を紡ぎ小車を繰りて、夜ふくるまで働きぬ。

或人其の孤獨を憐みて、「夫を迎へよ。」など勸めしに、つるの云へるやう、「他人を我が家に入れなば、母の心安かるまじ、母のいまさん間は、獨身にてあるこそよけれ。唯貧しき爲に心に任せぬ事の多かるぞ恨めしき。」とて、涙に咽びしを、聞く人袖を濕しけり。事官に聞えて、明治十八年十一月、縣令より金若干を賜ひければ、つるは大いに悅び、「是父母の恩なり。」とて、直ちに歸りて母に告げ、又親戚・隣里の人に向ひて、厚く恩を謝したりき。

明治二十三年六月、母の病重りて、賴少く見えければ、つるは憂に堪へかねて、十日餘は夜も睫を交へずして、一筋にいたはりけり。母いまはの際になり、つるを呼びて曰く、「汝かよわき身ながら、長き歲月の間家事を勤め、孝養遺る所もなし。今より後、汝は自らの身を大切にし、又汝の姉をいつくしみてよ。」といふ。つるは、「仰にや及ぶべき、心に懸けさせ給ふな。」と答へしかば、母は眉を開き、ほゝゑみてぞ身まかりける。時に年七十八なりき。つる、母の屍に抱きつき、いたく悲しみ歎きて、人心地絶えぬるばかりなりき。

つるが日夜勤勞せし結果として、田圃二段までひらきて、收穫せしものは、衣食の料にあてて餘ありければ、それをば縣令の賜と合はせて、郵便局に預け置きしを、此の時取り出して葬式の料に充てけり。

さて、喪畢りたる後も、朝夕に香を焚き、火を點じ、果物を供へなど、母の生けりし時の如くにし、又姉によく事へて、母の遺言をばあだにせざりき。つるは、斯く孝行すぐれしのみならず、一家の主として、公令を守り、田租・雜税など、掟のまに〳〵、人に先だちて納めけり。明治二十四年十二月、事、雲の上に聞えて、勅定の緑綬褒章を賜はり、善行を表彰せられたり。（井上毅）

秋萩のうつろひて風人を吹く　三浦樗良

花は世のためしに咲くや一盛り　捨女

高ぶらぬ氣をやぶ入りの土産かな　多代女

東西の武士道と婦人

西洋の武士道では、弱者を擁護するといふことが、重大な任務となつて居る。それ故、婦人に向つては特別な待遇をする。これは日耳曼民族の殊に女子を尊敬した風習と、基督の母マリヤを崇拜する信仰とが結合して起つたのである。今日の西洋の日常禮節には、その餘波がいくらも認められる。いはゆる女尊男卑といふ風に、東洋人の目に映ずるのは、其の慣習から出たことが多いからである。

日本の婦人は、武士に保護される弱者では無い。婦人自らが武士である。武士を崇拜する者ではなくして、自身が武士と同様の覺悟をもつて居るのである。かよわい婦人でも、心は男子と同じである。皇祖天照大神は、素盞嗚尊が天にのぼると聞召して、彼に黑き心あるならば、弟なりとも許すまいと、男裝して、弓矢を

携へ、一合戰する準備をなされた。神功皇后に至つては、自ら舟師を率ゐて三韓征伐の大業を成させられた。國初の婦人から、已にさうであつた。武人の族であつた巴や、板額の話を引くまでも無い。よし、實戰に臨まなくても、父や、夫や、子が戰陣に出で立つと、自分は固より討死同樣の覺悟を極めて居る。細川忠興の夫人は、從容三兒を殺して、自分も自害して果てた。苟も敵に降つて身を完うするより、死んで其の名を潔うする心は、男子と同樣である。二子を失つた瓜生保の母も、めゝしい泣言は決して言はぬ。まだ三人の男子があつて、御奉公が出來ると喜んだ。日本の武士道を驚歎するものは、其の裏面に、武士的婦人の在つた事を知らなければならぬ。正成の妻は、其の子正行を誡めた母であつた事は記憶しなければならぬ。古來、幾多の武人の功名の光輝の陰には、名も傳はつて居らぬ女性の内助があつたのを知らねばならぬ。

西洋の昔話に、ワインスベルヒの開城の話がある。久しい間の包圍に疲れて、愈、開城ときまつた時、城中の婦人から攻圍軍に向かつて、明日開城の際には、婦人が、各自肩の上で運べるものだけは許してくれよとの歎願があつた。何がさて、婦人を尊ぶ歐洲人の事とて、一も二もなく其の請は許された。翌日續々城門から出で來る婦人を見ると、皆其の夫を背負つて居る。城主のウェルフ侯も、亦其の夫人に背負はれて出た。寄手の軍勢は、これはけしからぬ事と怒つても見たが、約束の事故、其の儘になつたといふことである。

此の話で、我が國と西洋との武士氣質に、大相違のある事が認められる。城中の婦人の機轉、攻圍軍の寛仁が、此の話の主眼として、西洋人の耳には面白く響くであらうが、城中の武士一同が、おめ／＼妻子の肩にすがつて、城を落ちるといふことは、我等日本人には、どうしても武士の所業とは受取れぬのである。城内の日本婦人は、落城と共に皆自刃して果てるのである。かういふ話に照らしても、彼我の武士道に甚だしい差異のあることが、はつきりと分ると思ふ。希臘の

スパルタ婦人などは、寧ろ日本の武士道的婦人に近かつた。（芳賀矢一）

> 銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも　　山上憶良
>
> ひとの親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな　　藤原兼輔
>
> 親思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何ときくらむ　　吉田松陰

感想三題

一

女の涙は美しい。それはつめたい客觀の世界から離れて、極みない愛の泉よりしたゝり來る純情の一滴である。

併し多くの女子は、これを自己の遊戲として弄ばうとする。そして所謂「涙の征服」が、つひに「涙の陷穽」となることに心づかない。世に不良兒を救ひ上げた慈母の涙よりも、自己を僞つた技巧の涙が多いのは悲しいことである。

女子は涙そのものを卑しいものにしてはならぬ。むしろ、涙によつて象徴さるつゝましき純情の、男子よりも多分に惠まれてゐることを讃美せねばならぬ。

二

幼兒が母の懷に抱かれて乳房を含んでゐるときは、すこしの恐怖をも感じない。すべてを託し切つて、何の不安をも感じないほど、母性愛のめぐみが遍滿してゐるのである。

　いだかれてあるとも知らずおろかにもわれ反抗す大いなる手に

しかも、多くの人々は何故に自ら惱み、自ら悲しむのであらう。救の光の中に我等もまた幼兒の素純な心をもつて、安らかに生きたい念願を持つ。めぐみの中に凡べてを託し得るは、美しき信の世界である。

三

我々はせめて與へられた日々の糧の前に坐つた時だけでも、しみじみとした心をもつて、箸を取り上げたいと思ふ。一尾の魚に對してさへ、念佛して酬いられた親鸞上人の心持も、自ら窺はれる。

一椀の飯も、粒々みな法縁の辛勞からさゝげられたものであると思へば、合掌せずにはゐられない親しさ淚ぐましさを感ずる。

我々は天の恵と、地の福と、人の働きとを讃仰しよう。恵を絶えず求めて已まぬのは、しをらしいことである。併し、常凡な現實の中にも、ゆたかな恵を見遁してゐるのは、さびしいことである。（九條武子）

九條武子の歌

元結のしまらぬ朝は日ひと日黑髮さへもそむくかと思ふ

ふるさとにつけばたゞちにながめやる山みな今朝は霧こめてけり

千萬の寶はむなしたふときは親よりつづくたゞこの身のみ

家庭に於ける禮讓

私どもは自分自ら萬物の靈長と稱して誇つてゐるのでありますが、かやうに自稱する人類の中にも、非常に高尙な上品な人もあれば、また動物にも劣るやうな野卑な下品な人もあります。同じやうに文明の恩澤を受けながら軒を並べて住まつてゐる者の中にも、高い卑い、いろいろの相違があります。この相違を生じさせるものは一體何でありませうか。言ひ換へると、廣い意味に謂ふ人品の高下を定めるもの、どんな場合にも、自分の品位を保つと共に、他人に對する尊敬をも失はないやうな、眞の意味に於ける紳士・淑女の資格を作り上げる上に、最も大きな働をするものは何でありませうか。それは實に家庭に於ける禮讓であります。

法律は私どもに對して、かういふ事をしては他人を侮辱するとか、又は自分の

義務を怠るとかいつて、そのやうな行爲に對して制裁を加へるものでありますが、併し、日常の行爲について一々具體的に善處の方法を敎へるものではありません。さうして、それを敎へてくれるのが禮讓で、禮讓は、朝起きるから夜眠るまで、私どもの經驗する總べての事に就いて、自分の人品を高め、他人の感情を和らげる道を敎へてくれるものであります。英國の名高い政治家で且歷史家のエドモンド＝バークといふ人は、「禮讓は法律よりも肝要だ。」と言つて居りますが、それは此の意味を申したのであります。

禮儀のない家庭に育つた子供は、必ず不作法なものであります。諺にも「氏より育ち。」と申しまして、世間には、氏は良くても家庭が良くないために、習、性となつて、禮讓の何たるかを理解しない下卑な人間となるものが澤山あります。

私はこの點に於て、禮儀は空氣と比較することが出來ると思ひます。若し多人數集つて部屋の中に、窓を締め切つて長く入つて居れば、頭痛や眩暈がして、遂に

は倒れるやうになりませう。また大きな都市の人込の中に住んでゐれば、身體が自然に衰弱して、遂には病氣に犯されるやうになります。これはその部屋に居り、その都市に住むものの始終吸つてゐる空氣が悪いからで、家庭の禮儀もこれと同じ影響を持つて居ります。そればかりでなく、禮儀のない家庭が濁つた空氣よりも一層恐ろしいのは、人間生存の第一義たる精神を腐敗墮落させて、すつかり人間を野蠻化させるからであります。家庭に於ける禮讓の有無乃至厚薄の感化は、實に驚くべく恐るべきもので、それが自然の間に間斷なく行はれるだけ、決定的に人間一生の運命を左右します。諺に「朱に交れば赤くなる。」といひますが、これは友を擇ぶ上に當嵌まるばかりでなく、更に適切に家庭の空氣について言はれる事でありませう。

凡そ、どのやうな法律でも、また道德上の教でも、家庭の禮儀を基礎として立つてゐないものはありません。それ故、家庭の禮儀が廢れると、どんなに立派な教を說いても、嚴重な法律を設けても、その効果は見るに足らぬものでありませう。それと反對に、若し家庭に於ける禮讓が立派に行はれてゐれば、別に高尚な教を說かず、嚴しい取締を設けないでも、自然に向上して、美風がおのづからその間に成立ちませう。

社會を一つの大きな機械に喩へてみますと、禮儀はちやうどその機械を圓滑に運轉させる油のやうなものでありますが、その禮儀の本、油の源流は、家庭生活の間に行はれる禮讓であります。たゞ「お早うございます。」とか、「今晩は。」とかいふやうな簡單な言葉の中にも、人の心を和らげる非常な力が籠つてゐるではありませんか。世にこれほど骨折が少くて効果の多いものは、外にありますまい。さうして、ちよつとした物の言ひやう一つで、これほど人の感情を和らげることが出來れば、眞心からする禮讓の應接が、人の好感を得、社會の美風を成す基本となることは言ふまでもない事で、一家の主婦であり、また人の妻であり母であ

る者が、この點に就いて特に深く注意すべきは、更に言ふまでもない事であります。

社會の基本は一家であります。社會の美風は一家の美風を擴大することによつて實現することが出來ませう。私ども現代の女性は更に一歩を進めて、一家の美風の源流は女子の心情にあるといふ信念の下に、自重努力して、禮讓の美風を家庭に實現しようではありませんか。(鳩山春子)

婦人の教養としての國文學

一

文學は人間の記錄であるから、その中には人間生活に關する各般の知識がある、暗示がある、教訓がある、慰藉がある。文學は人間の僞らざる影像であるから、その中には人間の赤裸々なる相がある、人間性の眞實がある。随つてそれから來る反省、教訓のいろ〳〵がある。

しかし、物にはすべてその利のあるところには弊があり、功には又罪が伴なふことが多い。文學の利と功とを見る人は、同時に、その弊と罪とを考へることが必要である。世には文學を愛好し、尊重するあまりに、その社會への、人間への惡影響を忘れてゐる人もあるが、かゝる人は文學を知らず、その弊害のみを見て、

一概にこれを輕蔑し、排斥しようとする人とともに、謬りたる人である。我々は愛好するものに溺れず、愛好せざるものを毛嫌ひせずして、公平な判斷をあやまらぬやうにせねばならない。

文學には、小說・劇・日記文學・詩歌・いろ〳〵な形態があるが、そのいづれの形態に屬するを問はず、人間に關し、人間生活に關して、多量の知識を含むものである。それで、これに接し、これを鑑賞することになれた人々は、不知不識の間に、それから多量の知識を得て、おのづから人生に關する理解を廣め、深めてゐる。文學は時代の反映であり、時代生活の寫眞であるが、一見我々自身の生活とはまるで無關係であるかの如く見える古典文學からさへ、我々は我々の靈を培ふべき尊い知識を得、又相をかへて現代の生活に新しく生かすべき知識を得ることが少くない。況んや現代の文學から得るものは實に豐富であるのである。人々には、それ〳〵の特殊な職務・職掌・環境があるから、隨つて我々の直接の經驗、見聞に入り得べきものには限界がある。我々の書き物を通して得る知識は、直接に事物に接して得る知識を遙に凌駕してゐる。しかして、この書物の中、文學は主なるものの一であらねばならない。昔は小說のやうなものを、作り物語と稱して、人間空想の所產で、人生に必要な知識を與へない娛樂の方便物のやうに考へてゐたが、かかる考の當否を論ずることは、今や恰も白晝に幽靈を持ちださうとするに等しい愚である。

現實に對する不滿、理想に對する憧憬は、常に文學の內容を成す。さうして、文學はしば〳〵明日の生活への設けとなるものである。文學の中には現代に於ける幾多の缺陷が指摘されてゐると共に、これらの缺陷に對する解決の暗示を與へるものが多くある。

結婚生活や、家庭生活や、社會生活を取扱つてゐる文學には、常にそれが指摘してゐる現代の缺陷に關して、知識を與へるものがあるばかりでなく、これらの

問題の解決に關し、これらの缺陷の改善策に關して、種々なる暗示を與へることも多いのである。さうして、文學の內容としては、單に作者が直觀に依つて得た感想に止るとしても、作家や詩人の優秀な直觀力から得られたこれらの斷片的な想が、時流の常識の上に高く位置するものであれば、時には學者の研究にヒントをあたへ、その思想體系をつくる動機ともなり得るのである。

文學には、人生の悲哀痛苦を示して、人生の重荷を一層感ぜしむるものである。けれども亦、文學の描き、謠うて示してくれる世界には、崇高・醇美・悠久なる世界もある。所謂極樂淨土があり、神の國があり、理想の社會がある。詩人の錦心繡腸を通して見せられる自然や人生、作家の卓拔な想像力を通して覗かせられる人生は、光明と崇高と淸淨と純潔との充ちたものである。

かゝる文學は、窮屈な拘束の充ちた社會の生活、苦痛の多い人生から、暫くの休養を得んとし、樣々な娛樂を求め、慰藉を求めてゐる人々に、淸い慰藉を與へ、高い理想を與へるものである。

以上述べた所のものを、人間としての情操の教養と纏めて見てもよい。さうすれば、「婦人」としての局限された方面はどうであらう。人間としての教養に、特に「婦人」としての限界を與へらるれば、一層「情操教養」の必要を感ずることが切である。婦人も人間である以上、人間教養の外に立つべき筈はないが、特に「婦人」といふことを考へる時には、結婚生活、家庭生活といふことが先だつが故に、男子に比して、一層豐かな情操の教養を積むの要を感ぜしめられる。潤なく、熱なき干乾びた婦人を重要な成員とした家庭は悲慘である。殊にそれが主婦であつた場合を想像すれば、寒心すべきものがある。婦人と雖も國家社會的教養は大切であるけれども、文化社會婦人の最も重要な活動は寧ろ家庭に在らう。舅姑の最も勝れた保護者であり、夫の最も良い伴侶であり、而して、子弟・雇人の最も優れた教育者であるべき主婦の教養としては、それにもましたものは家庭的の教養で

ある。さうして、家庭的教養としては家事・裁縫に止つてはならない。すべての家事の煩瑣な事柄の運用の基礎ともなり、又、あらゆる家庭人との間の油ともなるものは、教養された情操であらねばならない。高い、清い、明るい、暖い情操であらねばならない。この意味で、文學に依る情操の教養は「婦人として」の限界を附する場合に、特に强調さるべきである。

二

文學は人間生活の記錄であり、人間の記錄であるから、人間的教養に有益である事、上に述べた通りであるが、又、世界のあらゆる人間は、或民族なり、或國民なりであることなくしては、人間であり得ないから、文化國を飾つてゐる文學は、その國民性・國民精神の表現である。從つて、教養の立場から見れば、文學は國民教養の上にも亦有益なものといはねばならない。

日本民族であり、日本國民である我々は、日本民族・日本國民であることなしには、人間であり得ない。苟も日本民族の血を傳へてゐるものであれば、日本的な生活を營み、日本的な環境に圍まれ、日本的な教育を受けてゐる。その一つでも持つものであれば、その生活に日本的な特徴を持つことを拒み得るものはあるまい。感じ、思ひ、行ふことの上に、日本人的な特徴なしには生きることは出來ないのである。かくして、國文學は如何なるものでも、人間記錄であると共に、又、日本國民の感じ、思ひ、行うたことの記錄に外ならない。即ち、日本國民の生活記錄である。

日本國民の生活記錄であることを通して、人間生活の記錄である所の國文學は、我々日本人の國民的教養、又、人間的教養上、最も貴重なるものの一つであるが、かく教養を二面に分けて考へるものの、究竟は一となるべきものである。日本人としての本質的なるもの、日本精神の精髓は、決して世界に孤立したものではなく、あらゆる人間の上に擴充さるべき普遍性を持つものであるに相違ない。我々

は、外國文學に依つても人間的教養を得ることが出來るが、なほ我々の生命の糧としては、國文學の上に一層適切なものを持つてゐる。恰も我々が西洋流の肉食をなして生きて行けるが、それよりは永い傳統を有する日本流の魚菜食を改善して行く方が、一層我々の肉體の榮養に適してゐるとされるやうなものである。消化も易く、又身體の機構の或部に故障を來すやうなことなしに、榮養たる職能を十分になすことが出來る。簡明にいへば、容易に血や肉や骨などになることが出來るのである。

日本文學に表れた精神は、我々日本人の感じ、思ひ、また、これを行ふ上に容易であつて、また、自己の内外に故障を起すやうなことのないものであるといひ得る。即ち穩健な著實な精神の榮養たり得るものである。しかし、こゝに注意すべきは、同樣な魚菜食でも、古今時代を異にするに從つて、その調理の上には色々の變遷のあつたやうに、形を變へ、調味料を變へて、これをその時代の人々に適するやうに工夫するごとく、日本文學の精神も、古代のまゝに、これを我々の現代生活に取り容れることは適當でない。これを現代に新しく生すことが必要である。それで、傳統的教養には、常に現代的教養が車の兩輪の如く伴なふを要するのである。現代的教養のみに傾けば、根柢のない、輕浮な人間となる樣に、又傳統的教養のみに傾けば、時代後れの固陋な人間となるのである。

我々は現代を知るには、色々な機會、色々な學問、色々な機關を持ち、又、實行上にも之を要求されてゐる。我々は現代に對する相當な理解なしには、一日でも生きて行けるものではない。併し、傳統的なものは、自然に殘存してゐるものでも、この滔々たる世界的大波のなかに在つては、動〻もすると、次第に遺亡されようとしてゐる。現に眠りかけてゐるものでも、よく考へれば、我々に取つて非常に必要なものもあるから、これらは、これを自覺的に呼び覺して、益〻涵養して行くやうにせねばならぬ。これを呼び覺し、これを涵養する道は、唯これを

抽象し、説明するだけでは足るものではない。これに親しみ、これを會得して、自然に我が身に附けるといふ方法が伴なはなければならない。否、それを主としなければならない。これには、文學、藝術に勝るものはないのである。

上代文學に表れた「まこと」の精神、そのいろいろな現れにしても、これを萬葉の歌など讀むとき、これに多大の愛著を感じ、憧憬をおぼえ、尊敬の念を持つて、自らなる精神の興奮を禁ずることは出來ない。かゝる精神は我々に取つて必要な精神であるばかりでなく、何處に押出しても立派な精神であることは、今更いふまでもない。「神にしませば」とか、「へにこそ死なめ」とかの歌にあらはれた忠の「まこと」は、永劫に失ふべからざる我々の寶であるばかりでなく、如何なる民族・國民でも仰ぐべきものである。

中古文學に表れた「物のあはれ」の精神も、そのまゝでは生活の相の非常に違つてゐる我々には不適當であるが、我々の全生活の中に、かゝる知・情・意の優しく調和した一面を持つことを誰が拒むだらう。猛きばかりが武夫でないと考へたやうに、かゝる優しい一面があつてこそ、日本精神は尊く、日本國民性は誇らしいのではあるまいか。

近古文學に表れた武士道精神は、相は異なつてゐるが、上古・中古の精神の内容を複雜にし、深くして、これを武士時代に適應せしめたものである。近世文學に表れた、義理を尊重する精神、人情に生きる精神も、亦これを現代に適用しても、よく我々の社會生活を圓滑にすべきものではあるまいか。法律や理窟に生きる傾向の甚だしい今日に於て、義理と人情の調和を目ざした、即ち、社會規範と人間愛とを協和させようとした生活は、これを排斥すべき理由は見出されない。

要するに、國文學の教養は、傳統的精神の涵養に重きを置かるべきであるが、國民的教養は、傳統的教養の外に、現代的教養を必要とするが爲に、それと調和を保たしめ、これを現代に生かす所に、その意義があるのである。（藤　村　作）

心のお化粧

最近、教養といふことが、いろんな方面で、眞面目に考へられるやうになつて來た。これは男女共に、本當の自分に目覺めつゝある現れとして、大變喜ばしいことである。

ところで、「結婚生活は眞の意味で教養の始まりである。」とは、詩聖ゲーテの言葉であるが、これは大體に於て間違つてゐないと思ふ。その意味で、婦人の教養（修養と云つてもよい）は、結婚生活への準備教育だと云つていゝわけである。私はそのつもりで、今日の女性は如何なる教養が大切であるかといふことを考へて見たいと思ふ。

教養とは、その人が、品性を高めるとか、知識を博めるとか、いづれも個人の問題であるが、婦人にとつては、彼女の全生涯を支配する結婚生活と密接な關係がある。教養のある女と、無い女とでは、結婚生活に入つてから、雲泥の相違がある。その點で、教養の問題は、男性よりも、女性にとつて、より大切なことだとも云へるのである。

ところが、實際はどうかと云ふに、必ずしも、さうだとばかりは云へない。これはある和尚さんの話であるが、ある檀家の父親がやつて來て、

「私の娘は女學校に行かれぬので、ひどく親を怨んで、お父さんは私といふものを勝手に生みながら、少しも教育しようとしない。そんなら私にも考へがある。不良少女になつてやるからと喰つてかゝるのです。いつたい、どうしたものでせう。」

と、いかにも心配さうに、云つたといふのである。すると、和尚さんが、

「よいことを教へてあげませう。娘さんにかう云つておやりなさい。お前が云ふ

通り、私は勝手にお前を生んだのだから、お前に教育させようとさせまいと、それも私の勝手だ。」

と、云つてやつたといふのである。いかにも禪僧らしい教へ方で、甚だ痛快だが、このやうな不心得な娘が、世の中には、他にも澤山あることゝ思ふ。

教養とは女性にとつて、最も優れたお化粧のやうなものである。白粉や口紅の化粧は一夜にしてはげるが、教養といふ化粧は、一生はげない。日と共に、年と共に、いよ／＼匂ひ深く、薫り高くなつてくる。教養とは、また、一生あせぬ美しい花のやうなものである。

教養は、決して、人の爲めにするものではない。然し、人妻となり、やがて母となる女性にとつて、それがいかに大切であるかといふことは、くはしく述べる迄もない。ハイネといふ詩人は「美人は、景色のよい風景畫のやうなものである。一寸見はよいが、すぐに飽きてしまふ。そこへゆくと、教養の高い女は、間取りのよい室だ。住めば住むほど、住み心地がよくなる。」

と言つてゐるが、これは至言だと思ふ。（菊地　寛）

花紅葉あだ比べして過ぐる世に街はぬ松ぞのどけかりける
千種有功

雨そゝぐ軒の下石くぼみけりかたき業とも思ひすてめや
橘守部

物皆は新しきよしたゞ人は古りたるのみし宜しかるべし
よみ人しらず

婦人の愛

日本人は笑はない國民であるといふやうなことを、屢、耳にすることがあるが、しかし、日本人は決して笑はない國民ではない。電車の中などで、殊に若い女たちが笑つてゐるのは、毎日のやうに見出すことである。時としては、腹立たしいほど笑つてゐる女たちを見出すことがある。も少し控へ目であつて欲しい、も少し肅かであつて欲しい、と思ふことは隨分ある。わたくしたちは、子供の頃、「男は三年に片頬」といふことを教へられたことがある。即ち三年に片頬だけ笑へといふことである。これは無論極端な話であるが、婦人といへども、人の面前で餘り人の感情を害ふやうな笑ひ方は謹んで欲しいと思ふ。尤も、無邪氣な少女たちの笑の如何に尊く懐かしいものであるかは、わたくしも知つてゐる。少女の清淨な笑は、この世界の詩であり光である。わたくしが不快に思ふ笑は、饒舌や無智や野卑を暴露するやうな、不純な笑を意味してゐるのである。

かういふ點に於て、日本人は、殊に一部分の女たちは、餘りに笑ひ過ぎるとわたくしは思ふ。無駄な笑をする暇があるならば、わたくしたちは、もつと／＼眞面目に考へて見なければならぬ、幾多の重大な人生問題を持つてゐる筈である。

米國の婦人は、新しい思想や文藝に對する趣味と理解力とに於て、男子より優れてゐるといふことである。繁雜な近代の都會生活は、男子を驅つて、殆ど物質的な生活にのみ走らせてゐる間に、婦人は室内に閉ぢこもつて、讀書し、靜觀する多くの機會を持つてゐるのである。このやうな境遇に置かれた婦人が、男子よりも秀でた新しい思想や、高尚な趣味を解するやうになるのは、必然のことである。將來我が國に於ても、婦人が國民の藝術・思想の主なる理解者であり、また創造者であるやうな時代が來ることであらうと思ふ。

メエテルリンクの言葉に、「脣がとざさるれば魂が眼ざめる。」といふやうな意味のものがあつたやうに記憶するが、わたくしたちの魂の眼をさますには、わたくしたちは、成るだけ口をとざしてゐなければならぬ。人の感情を害するやうな、不純な笑は排斥しなければならぬ。

婦人に共通な一つの大きな缺點は、徹底的でないといふことである。物の深い底の底まで徹し貫いて行かうとする氣魄のないことである。婦人は男性に幾倍して鋭い感受性を持つてゐる。けれども、その鋭い感受性を通じて感じ得たるものの眞底まで、貫いて苦しんで、考へて見ようといふ根氣を缺いてゐるやうに思はれる。

たとへば、婦人は物のあはれといふことに對して、恐らく男性以上に鋭い感じを持つてゐる。けれども、それはたゞ感傷的な、涙ぐましい感じに終つてしまふことが多くはないだらうか。物のあはれを通して、更にその底に、永遠を貫いて流れる大自然の寂寞を直感するといふやうな、哲學的・思索的方面に於て、或は男性に比して、極めて微温的な妥協的な點がありはしないか。

わたくしをして言はしむれば、日本人は笑ふことの代りに、も少し泣いて見なければならないと思ふ。夜を通して泣いた人でなければ、朝の光の尊さが味ははれないやうに、眞實に人生を泣いたことのある人でなければ、人生の有りがた味は分らない。また人生の尊さも味ははれない筈である。

婦人の第一の美徳は愛であるとは、誰しもいふことである。しかしながら、その愛ですら、その深さに於て、廣さに於て、婦人の愛は、男性の愛よりも、限られてゐるやうな場合が多い。

わたくしたちは、花の香にも比ぶべき自然のまゝの純一な愛の泉が、靈しくも婦人の魂から限りなく湧き出づることを知つてゐる。けれども同時に、婦人の美しい愛が、博い、深い、限りもない尊い愛とならないで、上滑りのした、技巧的

な愛に墮落してしまふことをも、餘りに多く見てゐる。

愛を措いて何處に人生があらう。殊に愛を忘れて何處に婦人の生活があらう。しかも從來、婦人の愛は主として一つの家庭といふやうな狹い世界に限られてゐた。しかしこの愛の心は、やがて人類全體をつゝみ、過去と現在と未來とを通ずる人間的な愛そのものの基調とならなければならぬ。愛がこのやうな博い深いものとなるためには、婦人自身がもつと思索的となり、内省的となり、宗教的・哲學的とならなければならぬ。

更にわたくしたちが婦人に對して感ずることは、極めて生一本な美しい婦人の愛の働き方である。本然的に溢れて來る婦人の愛の美しさは、どのやうに荒び果てた人の心をも、慈雨のやうに濕ほす力を持つてゐる。その力は燃えるやうに強い。しかしその缺點を言へば、盲目的になり易いことである。理性の判斷を忘れるといふことである。熱し易く、燃え易く、狂ひ易いといふことである。女の長所でもあるが、しかし、その熱し易い、燃え易い愛の心を、何時も誤なき方向に向けて置くといふことが大切である。燃え易く、狂ひ易き愛の心は、やがて愛の本性を失つた偏頗・盲信といふやうなものに墮してしまふ恐がある。

無論、一歩々々を打算的な考から進めて行くやうな所謂賢い女よりも、生一本な女らしい女の方が、どれほど女として尊いものであるかも知れぬが、しかし、たゞ美しいだの、浪漫的だのといふことと、立派な人間としての女といふこととの間には、大きなへだたりがある。人間としての女となるためには、婦人の愛に更に寛容といふものを加へなければならぬ。

婦人の愛は、一人の人を愛し貫くといふ點に於て、男より優れてゐるかも知れぬが、同時に一人の人を憎み貫くといふ執念さに於ても激しい。かういふ點に於て、わたくしたちは、殊に寛大な心、人の罪を許す心を持ちたいと思ふ。

キリストは、全世界を愛せよと言つた。佛陀の愛は、人類の上にも、草木の上

にも展げられてあつた。愛の廣さと愛の深さとにつれて、わたくしたち自身の生活が擴がり、わたくしたち自身の魂が伸びて行く。婦人自身の愛を廣くし、深くすることが、彼の女自身の魂を大きくし、深くすることである。（吉田絃二郎）

みどり子を見れば涙のかずそひてありしむかしぞいとゞこひしき　伊藤仁齋

子を思ふ心の道の心もて親に仕へよ世の中の人　松平定信

日本の女性

私の知つてゐる外國人の中に、一人の昆蟲學者がある。私とは違つた專門の世界に住む人であるから、私はその人の學識を批評することが出來ないが、性質の極めて坦懐な男であることを知つてゐる。この昆蟲學者は九月一日の午前十一時前、横濱から一二里離れた海岸で、一人の年若い學生と一緒に洋袴下一つで貝殼を拾つて居つた。所へ、例の地震で、續いて起つた大きな波の爲に、海岸に脱いで置いた著物を攫はれて仕舞つた。彼はつれの學生と共に無事ではあつたが、洋袴下一つで横濱へ歸らねばならなかつた。また其の時、この兩人は横濱が全滅してゐることを、どうして知ることが出來よう。平日であつたならば、胸も、もじや〳〵の巨大漢が素裸で歩くのであるから、確かにポンチに一好材料を提供したに

相違ない。しかし横濱への道筋に一杯出てゐる人は、いづれも一分間に倒れた家から、命から〲逃げ出した人だ。もとより素裸の西洋人を批評するやうな心の冷淡な人間でない。自分の苦しい間でも、外國人に同情し、外國人を尊敬する善良な日本人だ。素裸で歩く氣の毒な西洋人を見るに見かねて、一人の男が自分の著てゐたシャツを脱いで彼に與へたさうだ。彼の昆蟲學者は喜んでそのシャツを著てはみたが、體の小さい日本人のシャツであるから、彼の臍を隱すことが出來なかつた。沿道の避難者は彼に水を與へ、握り飯を與へ、相互に命拾ひした幸運を祝つた。彼が私に語つた言葉を用ひると「日本へ來てから隨分な年になるが、未だ嘗て此の時のやうに、單純で麗しい生命で輝いた日本人の顏を見たことがない。これまで日本人の感情は、私に取つて無關係のものであつた。また理解することが出來ないのであつた。然るに、この時初めて私は日本人、男より女に、一種莊嚴ともいふことが出來る喜ばしい顏のあることを發見した。陽氣と云ふ言葉を用ひたなら誤解されるかもしれないが、極めて元氣な、いそ〲と苦痛を平氣で背負つてのける勇敢な微笑の漂ひを發見した。私は白狀するが、これまで日本の女はさう美麗だとは思はなかつた。然し苦痛の場合に顯れる西洋の女の醜さを思ふと、日本の女がかういふ時にどんなに麗しく見えるかに駭かざるを得なかつた。實際、私を迎へてくれた沿道の女はチヤフィルースマイル（陽氣な微笑）を持つてゐた。この時私はかういふ女の國に住むといふ事を喜び、出來るなら一生を日本國のために捧げたいとも決心した。……君笑つてはいけない。かういふ決心をした外國人に限つて、日本を間もなく去つて、日本を罵倒し始める奴だと君は例の皮肉をいふかも知れない。然し私は日本の女の美を初めて發見した。……どうか私をしてこの新發見の甘い酒に、しばらくの間でも醉はさしてもらひたい。」この昆蟲學者の言葉は眞實な告白であつた。私はこの言葉をどんなに喜んだであらう。澤山の外國人は神戸や長崎へ逃げたり、甚だしいのになると、上海までも逃げて自

分の安全を謀つたのに拘らず、私の友人のこの昆蟲學者は東京に踏み止まり、帝國ホテルの地下室で、汗みどろになつて、米國の救護班と共に力一杯骨を折つた。この事はいつぞやの新聞にも彼の寫眞入りで出て居つた。

私は今再び、所謂日本人の笑ひといふことを考へる。この日本人の笑ひ位、西洋の文學者に興味を唆る問題はあるまい。小泉八雲も餘程以前それを取扱つた文を書いてゐる。日本人は男でも女でも、西洋人に對して不可解な謎の笑ひを持つてゐて、この祕密は到底知る事が出來ないものと思はれてゐる。私の友人の昆蟲學者は、この人生最も悲慘な場合に、「喜ばしい笑ひ」を發見したのであるが、我々日本人の眼で見たならば「喜ばしい笑ひ」と受取れないものであつたかも知れない。男でもさうであるが、日本の女の顏は槪していふと、お能の面だ……。消極的で、決して無表情でないが、表情を嚙み殺してゐる顏だ。泣くと笑ふとの間に立つてゐる顏だ。見やうに依つては怒つてゐるとも見えるし、又同情してゐるとも思はれる顏だ。一言でいふと、原始的な顏だ。苦痛を樂に堪へ、喜怒哀樂を感激的に出さない所が、原始的基調を捨てない文明人の長所だともいふことが出來る。若しこの大慘事に當つて、私の友人が發見したやうに、「喜ばしい笑ひ」を顯してゐるとすると、それは日本の女が原始人で而も文明人であり、文明人であつて原始的素質を捨てないからであらう。確かに日本の女は苦痛に堪へ得る。又感激的に喜怒哀樂を表現しない。否、表現する力を持たない。つまり、そこが日本の女の强みでなくて何であらう。日本の女が、その個性が西洋人のやうに、外面的に明瞭となつて來て、悲哀と笑ひとを全く違つた感情として取扱ふやうになり、言ひ換へると、平日は高い靴の踵を上げて舞踊し廻り、かういふ非常時に當つては、ぎやあぎやあ泣き叫ぶやうになつたとしたら、私は日本國民の將來を悲しむものであると云ひたい。小泉八雲は日本の偉大な點は日本の女にあると書いてゐるが、私もさうだと思はざるを得ない。言葉の上では消極・積極と分れては

ゐるが、實際では消極の方が、所謂積極以上に力強い場合が澤山ある。日本の女の性質でも、一寸見ると、消極的な弱いもののやうに見えるが、いよ〳〵となると、積極的に見える西洋の女より、遙かに強力な効果を顯すものであることが知れる。

私は今回の慘事で、日本の女の力に對し敬意を拂ふものである。私は全く日本の眞價を知つた。日本の女を見直した。（野口米次郎）

わが國の女性と海外發展

一

皇祖　天照大神は女性に在しまし、そのひろき愛、強く正しき御こゝろと、その清淨なる御姿こそは、實にわが日本女性の尊き久遠至高の象徴であらせらる。

大神が高天原から遙かに見渡し給うた國土は「空は青雲のたなびく涯まで、地は白雲の垂れ下る涯までに及び、大海は棹艪を乾す暇もなく、船の通ふ涯まで貢物を積んだ船が滿ち續き、陸路は貢物の荷をつけた馬が岩の根、木の根を踏みわけて、馬の爪を立てたる限り、どこまでも立續いてゐる。」と祈年祭の祝詞に言ひあらはされてゐるが、この雄大なる思想こそは、實にわが古代日本人のおほらかな世界觀と旺盛なる發展的精神とを物語るものであらう。

從つて、神代から上古にわたるわが國民精神は、まことに濶達進取的で、女性の氣持も亦おほらかにして、貞淑優婉、しかも內に一種の雄々しさを持して、常に男子と力を協せて、國土の開拓とその文化の發展に盡して來たのであつた。この事はかしこくも神代に於ける御物語を始めとし、神武天皇御建國の過程にあつてはいふまでもなく、更に降つては地方統治の爲め四道將軍の擧族移住と、その一族の地方に於ける分派繁榮、及び日本武尊の東方御經略に隨伴せられ、而かも崇高なる犧牲的精神を發揮せられた弟橘媛、或はまた先帝の志を繼がせられ、女性の御身を以て雄々しくも半島を鎭定せられた神功皇后等の御偉績にも、これを拜察することができるのである。

また奈良朝時代に、藤原清行の女喜娘が父の入唐に隨つて、雲山萬里、遙々唐の都長安（今の陝西省西安）に赴き、歸途は父と袂を分ち、非常な苦難に遭遇しつゝ都に歸還したことのごとき、その歷史に傳へらるるところは極めて少いが、又以て上古に於ける、わが女性が消極的ないはゆる籠りがちなものではなく、おほらかな世界觀を有つてゐたことを實證するものであらう。

併し中世に及び鎖國的國策に轉じた爲め、國民は不知不識の間に、そのおほらかな世界觀を消磨したやうに見られるが、これは決して、大和民族が本質的にこの氣象を喪失したのではなく、彼の室町時代に支那沿岸から遠く南洋方面にまで、荒き波濤を乘切つて活躍した八幡船の勇士達や、また德川時代に今の印度支那方面に活躍した山田長政乃至は、わが鄕土の生んだ偉材角屋七郎兵衛等のごとき、何れもその時代の政策と相容れざる爲め、女性の活動がそれに伴はなかつたものと考へられる。

然るに明治維新に際し、明治天皇には畏くも五箇條の御誓文並に御宸翰によつて、「舊來の陋習を去り」、そして「萬里の波濤を拓開し國威を四方に宣布」すべき旨を御示しになつてゐる。これこそは、實にわが大和民族本來の雄大なる發展

的精神への復歸に外ならないので、顧みればわが國民が鎖國長夜の夢に耽つてゐた間に、世界の情勢は全く一變して了つた。げに、わが國は列強に比べ土地は甚だしく狹小にして、天然資源は、この新時代に處して國民を養ひ、更に世界文化の水準線に沿うて國威を發揚するに足らないのである。故にわが國民はわが民族本來の雄大なる世界觀に目覺め、海外に雄飛し、その物質的缺陷を補ふとともに、その養ふところを以て、更に世界に對して宏く詔し給へる八紘一宇の御精神に基く、皇國文化の光被に力めねばならぬのである。

明治以來わが輝かしい國勢興隆の蔭には、幾多の尊い女性の貢獻がある。今やわが國は曠古の世界的大變革期に際會し、こゝに皇祖の詔示し給うた大理想顯現の第二の段階へと進まんとしてゐるのである。即ちそれは東亞諸民族と協同して、新しき東洋文化を建設し、世界文化への貢獻を爲さんとするものである。

かゝる秋に際して、わが國の女性たるもの、よく男子と力を戮せて、この大理想の遂行に當らねばならぬ。

二

それにつけても吾々は、彼の日露戰役の前後に亙つて、雄々しくも滿目荒寥胡沙吹きすさぶ蒙古に使し、喀喇沁(カラチン)王府に在つて親しく王及び王族子供の教育等に、獻身的に働かれた河原操子及び鳥居きみ子兩女史の名を忘れることはできない。

草枕涯しも知らず三人して蒙古が奥に出でたゝんかも
たそがるゝ沙漠のはてに星飛びて行くてはるけし今日のやどりは
茜さす入日の空に乘り駒の影消えて行く天地のきは
草を分けいばらを切りて登り來つ吹雪にこゆる興安の嶺

（鳥居きみ子）

これは、鳥居きみ子女史が明治四十一年の春から約一箇年に亙つて、夫君龍藏博士と共に、その幼兒を擁し、はる〳〵と内外蒙古の奥地探査に旅立たれた途中

の吟詠である。當時にあつては、馬背か粗雜な蒙古牛車のたすけをかるよりほかにすべもなかつたのである。しかも纖弱き女性の身に、乳兒をさへかゝへて、未知の涯しも知らぬ廣漠たる大蒙古の野をさまよひつゝ旅する心、それは今に比ぶればより以上に素朴で、所謂牧歌的な蒙古ではあつたが、時に月明の沙上遠く聞く胡弓、馬頭琴に悵然斷腸の思ひに打たれたこともあらう……。

これより先、女史は二箇年に亙つて、喀喇沁王府に在つて、專心その任務の遂行に力められた。その任期の滿つるとゝもに別れを惜まれつゝ、更に多數の男女留學生を伴つて歸朝され、彼等の爲めに親身も及ばぬ輔導に盡されたことは、その目的が深い人類愛に根ざすいはゆる東亞民族協同にあつたことは云ふまでもない。その後も女史は夫君の人類、考古學的研究の完成の爲めに、滿洲事變直後、令息、愛孃を伴ひ、夫君と共に治安の充分恢復せぬ蒙地に入り、その踏査研究を幇けられるなど、眞にわが婦德が時代に發揮せられたもので、こゝにも、わが大和をみなの、時に處しては、男子にも遜らぬ健氣な強い犧牲的精神が見出されるのである。

而してその前任者として、日露戰役前に婦人の身を以て單身入蒙した河原操子女史の殘された偉大な業績のごときも、亦以て國策への直接的使命の雄々しき遂行者とさへ讃へ得べき性質のものである。

更に、その方面こそ異なれ、略〻時代を同うして、安井哲子女史が遠く海を超えて暹羅王國の女子教育の爲に幾多の貢獻をせられたことは、わが國の文化を海外に示すとともに、その後わが女性の同方面に對する活動の先驅をなすものである。

また近くは現に北京に於て、私費を以て崇貞學園を獨立經營し、血の滲むやうな困難と鬪ひつゝ、異民族たる支那下層女子への授産と、その教養の爲めに獻身的活動を續くる清水安三氏を助けて、優にその功の一半を占めるとさへ稱せられ

たが、不幸中道にして、世を去つた故美穗子夫人の崇高な姿を偲ぶとき、「われに亦その人あり矣」の強い感激に打たれざるを得ない。

更にまた輓近、ことに滿洲國成立以來、滿洲の曠野に默々として大地開拓の聖鍬を振ふ多數國策拓士の蔭に、これを輔け、ひたすらに精進しつゝある幾多の女性を見ることは、寔にこゝろ強き極みであつて、こゝにも日本婦道の時代的に發揮せられつゝあるを見るのである。

畢竟するに、現に進行しつゝある我が日本帝國を中核とし、盟主とする東亞諸民族の協同による新秩序建設の大業も、神武天皇の高く揭げ給うた御理想を神の導きに依つて、これを成し遂げんとするものである。

この秋に當つて、わが國の女性たるものは、單に貞淑溫良の修德を以て滿足することなく、更に併せてこの高遠なる大和民族の理想を男性とゝもに分擔し、遂行するに足る雄々しき氣魄を必要とするのである。

（岡野一朗）

現代女流歌人の歌

樋口一葉

よしといひあしといふともから衣たゞ身一つをつゝむばかりぞ

若山喜志子

老いはてし父のまします信濃路よはるかに見ゆる雪のむら山

四賀光子

若竹の風のそよぎに磨る墨のにほひを立つる朝の手ならひ

今井邦子

かにかくに野に秋草の咲きいでゝ兒は片言を言ひそめにけり

茅野雅子

まれ人に椎の實まゐる山住のしづかなる日や秋の雨ふる

與謝野晶子

金色のちひさき鳥のかたちしていてふちるなり夕日の岡に

日本女性の詩二篇

操は嚴冬雪ふるなかに、
ほゝゑむ寒梅にほひやたぐふ。
ほまれは千尋暗なる谷に、
潜める幽蘭かをりに似るか。
いさをは蒼溟波捲く淵に、
輝く白玉光といづれ。

嗚呼君、見えざる無上のいさを。
嗚呼君聞えぬ至高のほまれ。

嗚呼君知れざる究竟の操。
大なる國民、君よりおこる。
涙になさけに操に愛に、
嗚呼君、やさしき女性の力。

（土井晩翠）

一

青空に創（つく）られしもの、
日は母よ、
かゞやきぬ、げに、
かの朝風と
朗らけき古代日本。

初あり、この民族の
女性よ、われら、後あり。

二

潮騒と新しきもの、
目も青き、
地の香の愛、
見よ、島々の
豊かなる母體日本。
光あれ、この民族の
女性よ、われら、清明けし。

三

今にして美しきもの、
よき婦德、
幽かなる眉。
聽け、とゞろける
吾が生みの未來日本。
響き合へ、この民族の
女性よ、われら、育てむ。

（北原白秋）

菊　盛

少女たち、黄菊には古代のかをりがある。
純粋に日本の寂びと氣品がある。
ああこの靜かな菊の香の苑に坐らう。

少女たち、黄菊には九重のみけしきがある。
雲の上の日と月のにほひもする。
わかい帝の御いきづかひが聞える。

少女たち、黄菊には御鏡の明りがある。

森嚴な賢所のみけはひも澄む。
皇后宮も白い唐衣でお出ましになる。

少女たち、黄菊には紫宸殿の午後が光る。
高御座の金の鳳、玉旛の玉や、青地錦、
かう〲しい黄櫨染の御袍も拜される。

少女たち、黄菊には聖駕の軋みもこもる。
儀仗兵の旗槍もちら〲つゞく。
ああ、さうして日本の民族の新しい祝福が來る。

（北原白秋）

千代女の俳句

夕顔や物のかくれて美しき

蜻蛉釣けふはどこまで行つたやら

破る子のなくて障子の寒さかな

朝顔につるべとられてもらひ水

蝶々や何を夢みて羽づかひ

ころびても笑うてばかり雛（ひひな）かな

春雨や美しうなるものばかり

花と針の心問ひたき茨（いばら）かな

川柳

物差で晝寝の蠅を逐つてやり

うたゝねもいつか著てゐる母の慈悲

井戸端へ子の行く夢に母は汗

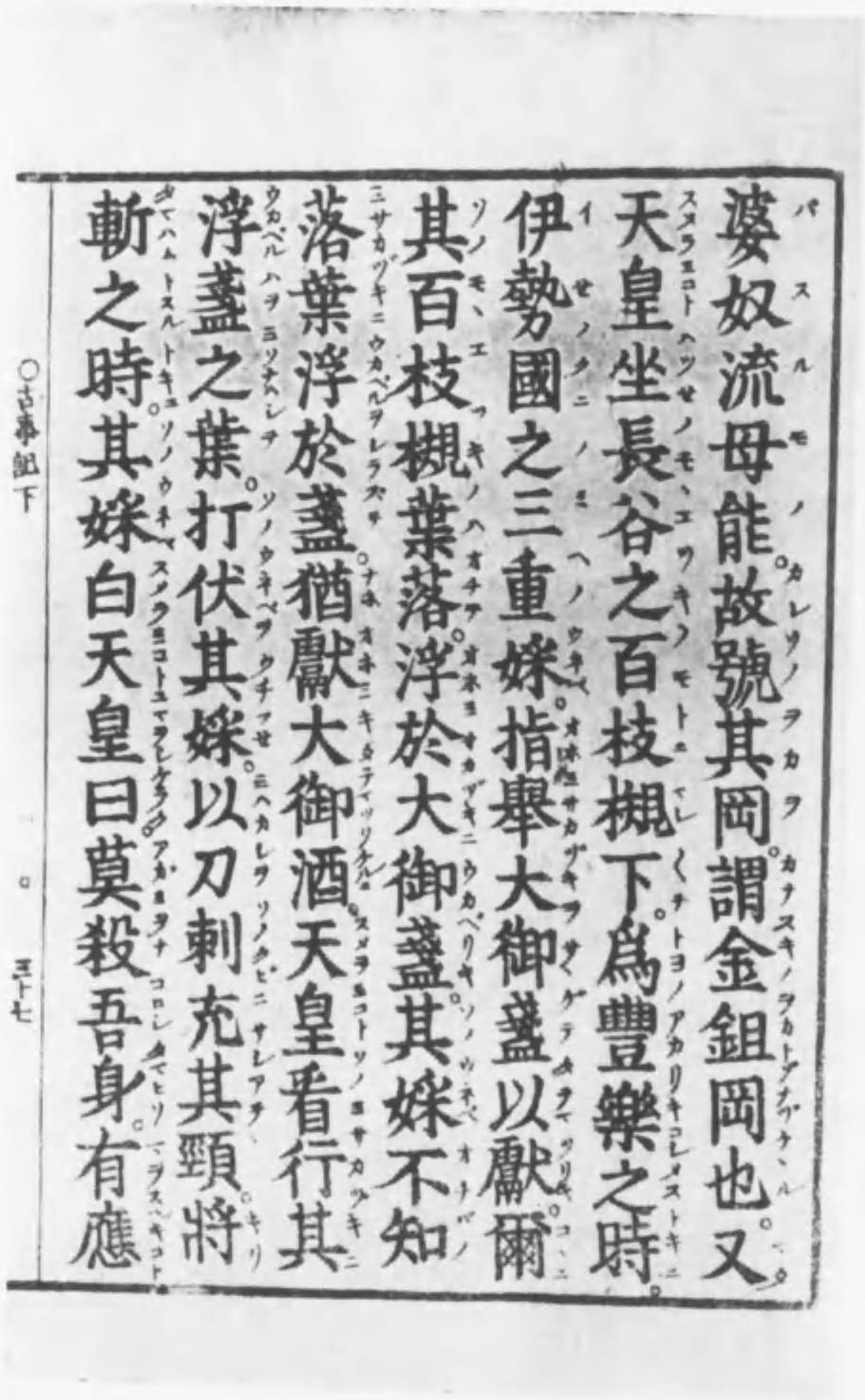
寝てゐても團扇の動く親心

花嫁は口をつぼみにして笑ひ

三重采女

天皇、長谷の百枝槻の下に坐しまして、豐樂きこしめす時に、伊勢の國の三重采女、大御盞をさゝげてたてまつりき。爾に其の百枝槻の葉落ちて、大御盞に浮べりき。其の采女、落葉の盞に浮べるを知らずて、猶大御酒獻りけるに、天皇その盞に浮べる葉をみそなはして、其の采女を打伏せ、刀を其の頸に刺充てて、斬りたまはむとする時に、その采女、天皇にまをしけらく、「吾が身をな殺したまひそ、白すべき事あり。」とまうして、即ち歌ひけらく

纒向の日代の宮は、
朝日の日照宮、夕日の日耀る宮。
竹の根の根足る宮、木の根の根延ふ宮。


婆奴流母能。故號其岡謂金鉏岡也。又
天皇坐長谷之百枝槻下。爲豐樂之時。
伊勢國之三重婇。指擧大御盞以獻。爾
其百枝槻葉落。浮於大御盞。其婇不知
落葉浮於盞。猶獻大御酒。天皇看行其
浮盞之葉。打伏其婇。以刀刺充其頸。將
斬之時。其婇白天皇曰。莫殺吾身。有應
○古事記下　　○　　三十七

古事記中三重采女に關する記事の一部

八百土よし、い杵築の宮、眞木柝 檜の御門。」
新嘗屋に生ひ立てる、百足る槻が枝は、
上枝は天を覆へり。
中枝は東を覆へり。
下づ枝は鄙を覆へり。」

上つ枝の、枝の末葉は、中つ枝に落ち觸らばへ、
中つ枝の、枝の末葉は、下つ枝に落ち觸らばへ、
下づ枝の、枝の末葉は、蘭衣の三重の子が、
捧擧せる瑞玉盃に、浮きし脂 落ち浸漬さひ、
皆凝 凝に、是しも甚に畏し、

高光る日の皇子、事の語り言も　此をば。」

故此の歌を獻りしかば、其の罪赦さえにき。爾に大后、歌はしける其のみうた

大和の此の高市に、小高る市の堆。
新嘗屋に生ひ立てる、葉廣、五百箇眞椿。
其が葉の廣り坐し、其の花の照りいます。
高光る日の皇子に、豐御酒たてまつらせ、事の語り言も　此をば。

即ち天皇歌はしけらく

百磯城の大宮人は、
鶉鳥　領巾取掛けて、鶺鴒　尾行合へ、
庭雀　群集り居て、今日もかも、酒水漬くらし、
高光る日の宮人、事の語り言も　此をば。

此の三歌は天語歌なり。故、此の豐樂に、其の三重采女を誉めて、祿多に給ひき。

（古事記）

くしろまく答志の崎にいまもかも大宮人の玉藻かるらむ

柿本人麿

飯高諸高

(光仁天皇)寶龜八年五月(辛丑朔)戊寅、典侍從三位飯高宿禰諸高薨。伊勢國飯高郡人也。性甚廉謹、志慕貞潔。葬奈保山天皇(元正)御世、直内教坊。遂補本郡采女。飯高氏貢采女者、自此始矣。歷仕四代、終始無失。薨時年八十。(續日本紀)

伊勢大輔の歌

古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな

人の子の親になりてぞ我が親の思はいとゞ思ひ知らるゝ

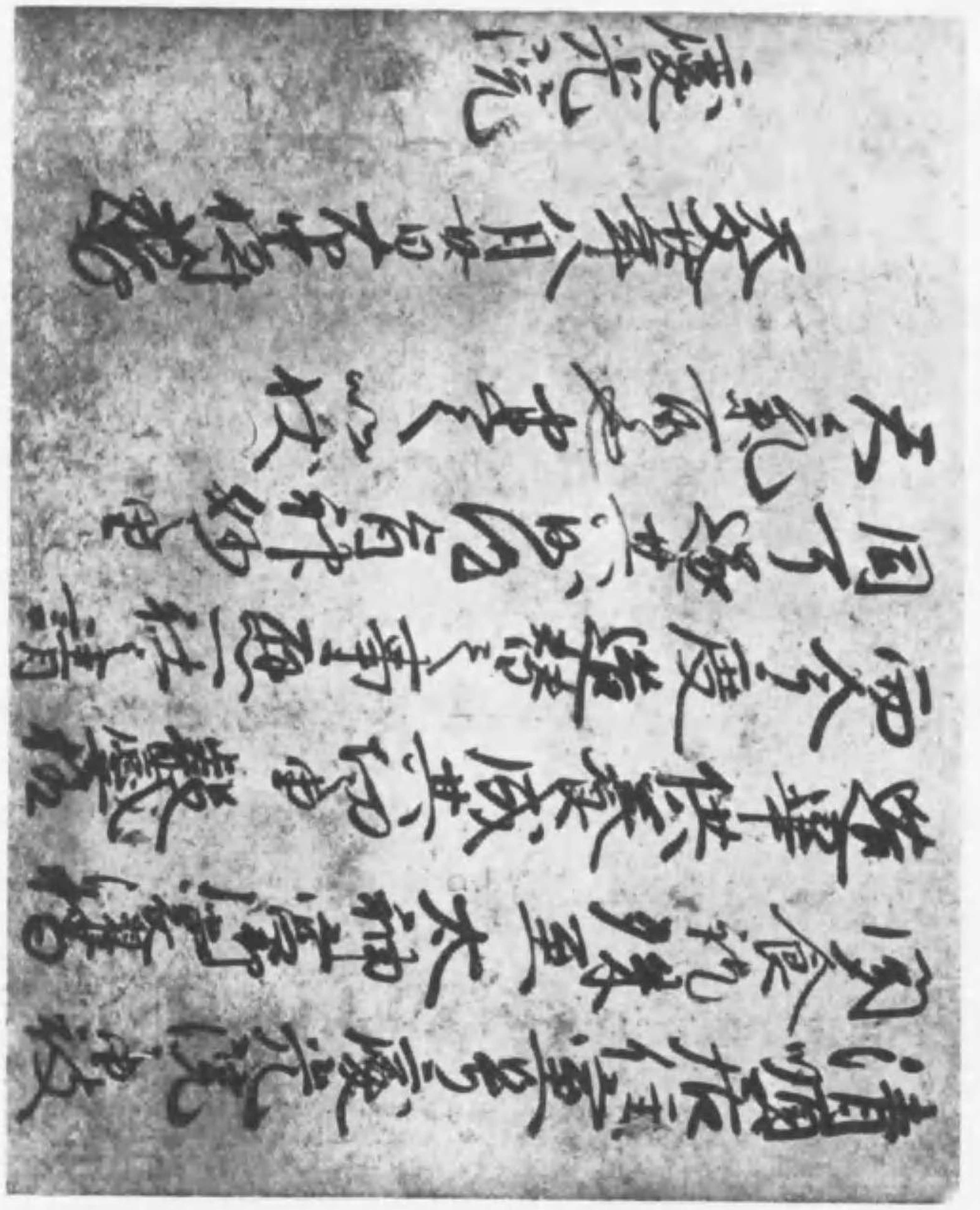
靜能制動。沈能制浮。
寬能制偏。緩能制急。

井上金峨

慶光院の神忠

尼守悦は、宇治慶光院の住持なり。廷臣飛鳥井氏の女なりと云ふ。年十八歳剃髪して、紀州熊野に居り、屢〻神宮の所在に至り、宇治辨財天堂の穀屋に勤仕す。明應四年宇治に洪水あり。大橋を流失す。當時戰亂相踵ぎ、神宮の衰頽甚だしく、架橋の資なし。守悦自ら諸國に勸進し、永正二年を以て功を竣ふ。是に於て守悦、神忠の名縉紳の間に聞え、上下の信頼を一身に聚め、遂に慶光院を中興す。六年七月十八日寂す。二世尼智珪嗣いで寺主たり。

三世尼清順は近江國浅井郡の人、其の先き新羅三郎義光に出づ。義光二十二世の孫左京進山本義里、京極氏に仕へて功あり。後六角氏に仕ふ。清順は實に其の姉なり。長じて尼と爲り、紀州熊野入鹿に居り、慶光院第二世智珪に師事し、屢〻



慶光院に賜はりたる綸旨

熊野より來りて宇治辨財天堂の穀屋に勤む。時足利氏の末葉に當り、戰亂相踵ぎ、朝廷の式微其の極に達す。神宮の頽廢亦甚だしく、兩宮の祠官窘窮して徒に私爭を事とし、兩宮式年正遷宮の大典も、廢して行はれざること百數十年。殿舍朽壞、宮門倒潰、內陣亦雨露の侵す所と爲り、冒瀆陵夷殆ど言語に絕す。時に清順、慶光院に住して宇治に在り。深く之を憂ひ、慨然として神宮の復興に志す。乃ち初代守悅の例に倣ひて諸國を勸進し、先づ宇治大橋を造替して、法華經一萬部供養を修す。實に天文十八年なり。二十年朝廷功を賞して慶光院號勅允の綸旨を賜ふ。清順益、感奮、誓って正遷宮復興の志を達せんとし、之を內宮の祠官藤波氏秀に謀る。氏秀意甚だ動くと雖も、而も躊躇して決せず。蓋し本地垂迹、神佛混合の流弊滔滔として天下に靡漫し、獨り神宮のみ此の弊を受けず。若し僧尼に緣りて事を擧げば、或は宮垣を穢さんことを恐れてなり。清順已むを得ず、轉じて豐受宮の造替を先にせんとし、使者を以て外宮禰宜久志本常晨に說かしむ。常晨爲に外宮

長官松本備彦等に謀る。備彦等亦之を僧尼の手に委するを欲せず。清順憤慨已まず、更に己の詔刀師（家祭を司る神官）足代弘興をして備彦に説かしめて曰く、若し容れられずんば志を轉じて力を内宮に致さんのみと。蓋し當時内外兩宮祠官の軋轢、其の極に達したるを以て、諷するに内宮に先んぜられんことを以てし、其の決意を促せるなり。是より先き、永正年中假殿遷宮の事あるや、兩宮祠官等各〻其の先後を爭ひ、遂に公裁を仰ぎ、外宮の勝訴に歸せり。若し今日に至り内宮に先んぜられんか、前年の裁決も亦空文に歸せんのみ。是に於て外宮の祠官等終に清順の言を容れ、朝廷、幕府に申請して之が裁許を請ふ。是より清順身を挺して豐受宮造替正遷宮の事に當り、尼僧の身を以て諸國を勸進すること十一年。遂に永祿六年九月二十三日正遷宮を執行し、永享以降百三十年の廢典是に於て復興せり。清順更に内宮の正遷宮の執行を見んとして果さず。九年四月宇治に寂す。四世周養其の志を繼ぐ。

四世尼周養は宇治、山幡四郎右衛門の女なり。夙に髮を剃りて慶光院清順の法嗣と爲る。周養亦敬神の念厚く、先師清順の遺志を承けて、鋭意皇大神宮造替の事を企畫し、元龜三年二月假殿造替の綸旨を蒙り、躬ら諸國を勸化して資財を募り、天正三年三月十六日皇大神宮假殿遷宮を執行す。時に織田信長近畿を戡定し、先づ皇宮を修築して尊王の衷を表す。信長周養の神忠に感じ、大に優遇す。周養亦屢〻信長の爲に戰勝を祈る。十年正月、外宮祠官正遷宮の資を信長に請ひ、造營の端緒漸く開けたるも、未だ半歳ならずして本能寺の變あり。豐臣秀吉遺業を繼ぎ、十二年三月兩宮正遷宮料として金子五百枚、米千石を寄せ、周養及び外宮權禰宜上部貞永をして之を受けしむ。是より先き、十一年六月、先例に依り大神宮正遷宮料勸進の綸旨を周養に賜ふ。周養勸進頗る勗め、得る所の造營料を併せ、十三年十月遂に兩宮の正遷宮を行ふに至れり。寛正三年以來、皇大神宮正遷宮の大典廢絶せること、實に百二十二年、是に至りて始めて復興す。正親町帝叡感あ

り。綸旨及び宸翰の扁額を周養に賜ひ、其の功を賞す。是に於て神宮と慶光院との關係親密と爲り、朝廷よりは屢〻國家安全寶祚長久の祈禱を命ぜらる。秀吉亦度會郡磯村の内百石を寄せて之を褒す。朝野の尊信隨ひて厚し。旣にして式年正遷宮の期漸く近づくや、周養復、資を德川幕府に請ふ。幕府乃ち朱印を周養に下して、兩宮正遷宮の事を行はしむ。爾來神宮造營の資は幕府の辨ずる所と爲り、復、慶光院の募緣を勞せず。是より先き、慶長六年二月宇治大火、大橋燒失す。周養其の改架を豐臣秀賴に請ひ、十一年四月功を竣ふ。尋いで十四年九月兩宮正遷宮成る。周養の神宮正遷宮式に與ること前後二回なり。慶長十六年四月二十六日を以て寂す。

五世尼周清は、山田祠官河合氏の女にして、四世周養の姪なり。周養の弟山本義時の猶子と爲り、慶光院に入る。慶長五年五月、上人號を賜ひ、紫衣を許され、朝廷の禱祀を命ぜらる。八年九月德川家康征夷大將軍に任じ、先例を以て朱印を周養に下し、式年正遷宮の事を執行せしむ。周清師を佐けて專ら事に從ふ。十六年四月周養寂して五世の住持と爲る。寛永二年十二月、幕府又兩宮正遷宮執行を周清に命ず。爾後萬治二年皇大神宮臨時遷宮に至るまで慶光院は常に之を奉仕す。周清德川氏の庭闈に出入して、將軍の親昵を得。營中爲に一室を設け、府下別に邸宅を賜ひ、而して往來には亦驛馬を給せらる。又中宮東福門院の寵眷を蒙り、常に祈禱の命を奉じ、京都に邸宅を賜ふ。公武の間に來往して隱然勢力あり。世之を伊勢上人或は遷宮上人と稱し、熱田の誓願寺、善光寺の大本願と與に、日本三上人の名あり。寛永十一年將軍家光伊勢國度會郡磯村の内二百石を寄せ、尋いで百九石を加ふ。曩に秀吉が周養に寄する所を合して四百九石を食み、別に兩宮神領の内百八十石を分ち領す。寛永十一年退老して六世周寶をして繼がしむ。慶安元年九月寂す。明治三十八年十一月天皇伊勢に行幸の次、慶光院歷代の神忠を追賞せられ、特旨を以て守悅に正四位、清順に從三位、周養に正四位を贈り給ふ。

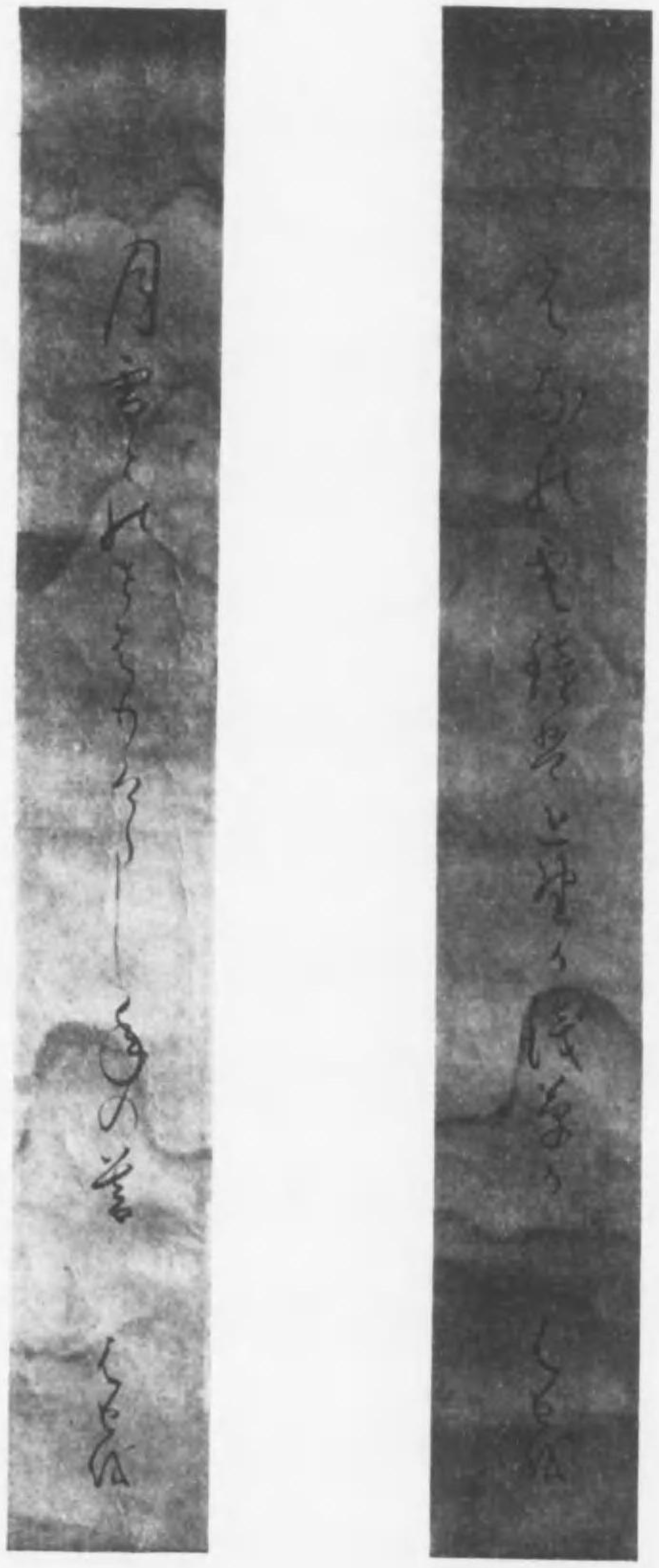
（先賢遺芳）

芭蕉の文並に俳句

便りも文月の魂祭る頃、武陵より古里に歸るに、二十とせの月日も夢なれや。北堂の萱草も霜枯れて、今はその面影だに無かりしが、何事も昔に立ち變りて、はらからの鬢白く眉皺みて、つれなき命ありとのみ、云ひ出づる言の葉もなきに、兄の守袋を解きて母の白髪拜めよ、浦島が子の玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと、年月の怠りはかたみに泣きつゝ

家　は　み　な　杖　に　白　髪　の　墓　ま　ゐ　り

代々の賢き人々も、古里は忘れ難きものに覺え侍るよし。我今ははじめの老も四とせを過ぎて、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまた齢傾きて侍るも見捨て難く、初冬の空のうち時雨るゝ頃より、雪を重ね霜を經て、師



松尾芭蕉の筆蹟

走の末伊陽の山中に至る。猶父母の在そかりせばと、慈愛の昔も悲しく、思ふ事のみあまた有りて、

古さとや臍の緒に泣く年の暮れ　(白髪吟)

芭蕉の俳句

たふとさに皆押し合ひぬ御遷宮

初時雨猿も小蓑をほしげなり

名月や池をめぐりて夜もすがら

梅が香にのつと日の出る山路かな

荒海や佐渡に横たふ天の川

度會園女の俳句

いそがしや菫を摘めば土筆(つくし)

寢どころへ扇にすゑし螢かな

負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな

凩やつゞいて啼きし猿の聲

ある程の伊達仕盡して紙衣かな

おもしろう松笠燃えよ薄月夜

冬梅の一つ二つや鳥の聲

服部土芳

さつ女

一志郡七栗郷一色村にさつといへる娘ありて、老耄したる父母に孝養を盡すこと、里人の感歎する所なりしが、薄命の者には凶事相つゞく事多くして、或年の春の初に母を亡ひ、また秋の終に父を亡ひぬ。さつの悲歎いふべきにあらねば、里人等その不幸を憐み、各〻來りて之を助け、漸くにして葬をも濟せけるが、偖百ケ日の祭過ぎければ、さつは村内にて父の借り置きし金錢を償はむが爲とて、奉公に出でむといふに、里人等は婿をとりて家督をせよと勸めけれども、さつ毫も肯はず、只借財を返さねば兩親の靈も穩には坐さじと、堅く賴みて、享保九年甲辰の春安濃郡澁見村なる某方へ年期定めの奉公に入りぬ。かくてその年の三月下澣、或日の黃昏頃、一頭の鹿獵夫に逐はれ、わが軒さして逃げ來りしが、見る

間に厠と萩垣との間へかくれぬ。

獵夫之を見失ひ、遙に他方へぞ追ひ行きける後、さつ近くよりてその鹿を見るに、手負ひたりと見え、苦しみ惱める狀いと哀れに、特にうゑたりとみえければ、尙更不便の事なりと思ひ、日の沒りはつるを待ち、己が夕食の半を分かち、もち行きて與へたるに、鹿は嬉しき面貌爲しつゝ、その食をくひ盡し、やがて又西方をさしていで去りぬ。さてさつ其の後も慈仁深くして、かゝる所行尠からざりしが、その後深く此の家夫婦の心に協ひ、親族中の人々にも愛せられければ、遂に當家の嫁となり、大いに幸をえしとぞ。それ仁慈は他の爲にはあらで、やがてわが身の爲となること明なり。禽獸蟲魚の上にも及ぼしたきは慈愛の行なりかし。(三重縣德行錄)

山田利登

山田利登、寛保元年安濃津八町に生る。幼にして父母を喪ひ、近親の鞠養を受く。後山田古市の娼樓千束屋久五郞に嫁す。利登舅姑に事へて順、夫に事へて貞なり。嗣子夭し、幾もなく夫亦死す。一時樓を閉ぢ、松阪に屛居す。利登奮然決する所あり。再び古市に來り舊業を復し、能く家事を宰理し、狹斜の巷に在りて、毫も輕浮安逸の風なく、儉素自ら奉じ、質實克く守る。婢僕風化し、鄉黨視て以て寡婦の範となす。家漸く富を致して、儉素謙讓の念愈〻堅し。後其の生業の終に子孫に禍せんことを恐れ、斷乎として店舖を閉ぢ、勤儉自ら處る。而して公益の爲に財を捐つるを吝まず。古市の東に牛谷坂あり。内宮外宮間の要路にして、延寶年間内宮祠官藤波氏富の繫修を經たりと雖も、坂路猶嶮峻にして行旅甚

だ艱む。利登夙に之を慨し、貯ふる所の私財八百兩を官に獻じ、以て新路を開鑿せんことを請ふ。官其の特志を嘉して之を許す。其の年工を起し、二年にして成る。開鑿する所の道路、幅四丈八尺、之を鑿平すること一丈乃至九丈六尺四寸、長さ百九十四間に至る。費す所前捐八百兩の外、尙雜資二百兩あり。皆悉く之を辨ず。之を舊路に比すれば夷にして直く、行人今に至り謳歌して過ぐ。文政十一年十一月二十九日病みて死す。年八十八。明治二年官其の偉功を賞し、子孫に苗字佩刀を許す。四年中此の阪路及び山田倭町尾部坂の道路、霖潦の爲に崩壞す。利登の裔山田千東祖先の遺志を繼ぎ、金百二十圓餘を抛ちて之を修理す。

（先賢遺芳）

清水こと女

何處の人たるを知らず。小川町に棲み、老後には兩宮へ日參することを勸めとなし、「おかず日參」と稱せられた。文久元年（紀元二五二一）十月三日九十二歲にして歿した。

こと女の日參は山田市內各戶に就きて錢穀を受け、その施主の爲に兩宮に日々の代參を爲すのであつたが、斯樣な賤しい身分であるにも拘らず、天性慈愛の心深く、孤兒又は貧窮者の兒女を引取つて養育した樣子は、丁度現今の孤兒院の事業と同じである。市內家々に於ても其の奇特を感じ、慶弔の事ある際は成るべく彼の女を賑はすやうにと心掛けたほどである。彼の女は乞ひ得たる御初穗は、此等兒童の養育費とする外は、決して濫費せず。成育した孤兒には適當なる職業を得

しめ、また配偶者を求めて、一家を構へさするまでの懇切を竭したものである。安政年間に外宮北御門の石垣改築の際は、神恩の萬一に報い奉らんとて、日頃の蓄積を傾けて、金十兩を土手普請に寄附したと云ふ事である。晩年孤兒の中に養嗣を求めて、家を立てしめたが、死歿したる後は絶家の止むなきに至つた。

（宇治山田市史）

蓬摘む日も此の道や芹なづな
鶯の調べもふかし竹の奥

中川乙由

加兵衛後家ゑん

右の者姑へ孝心に仕へ申候。ゑん儀當年四十五歳に罷成、夫加兵衛は十五年以前病死仕候。姑誓心、幼少の子供、加兵衛弟宇兵衛共四人の世話仕り暮し居り候。右宇兵衛儀は亂氣者にて御座候。右誓心儀及老年居候故、常々不自由無御座様心懸、誓心申候事を不背、朝夕たべ物等も心に叶候様に拵へ給はせ、其の上誓心七年以前より腰拔居候處、晝夜そばを不離、用事に付外へ罷出候ても母待かね居可申と申候て、早く歸り、介抱のみ仕り、暑さの節は涼しき所へ寢所を拵へ休ませ、寒氣の節は日の照込候所へ寢所を拵へ屛風を立廻し、一日之内には幾度も居所をかへ、心安き者共參候得ば、母のそばへ參り逢ひ呉れ候様申し、逢はせ悦ばせ、勿論兩便共手に掛け、年來介抱能仕へ申し候を、誓心常々滿足仕り、隣家

の者共参り候得ば、ゑん儀扠々孝心にいたし呉候に付、不自由成る儀終に無レ之、孝行に致呉候段申盡、朝夕佛を拜み候頃には、ゑんを拜み暮し候趣申候、誓心實子娘近所へ緣付仕居申候、右娘去々年死去仕候。其の節も人々悔を申候得ば、一人の娘の儀故、愁傷には存候得共、ゑんに離候程には不レ存候、ゑん若し我より先へ病死等いたし候儀在レ之候はゞ、我もともに果可レ申と存候抔と、ゑん事のみ厚く噂仕、悅申候。其の外何によらず、至つて心底厚く相見え、箇條難二申上一奉レ存候。然る所誓心當八月九十歲にて果申候。隣家の者共、右之趣常々見及聞及、感心仕候儀に御座候に付、乍レ恐御注進申上候。

明和元甲申年十月

（勢陽善人錄）

津公園にある孝女登勢頌德碑

孝女登勢

登勢は員辨郡阿下喜村の農近藤傳藏の女なり。天明八年を以て生る。初め山田、井村吉兵衛に養はる。吉兵衛子を擧ぐるに及び、再び安濃郡連部村、前田傳藏の養女と爲る。時に年甫めて六歳、後、傳藏夫妻倶に惡疾を病み、力作すること能はす。家計日に窘迫し、遂に食を郷閭に乞ひて纔に活く。登勢時に年十三。深く其の窮苦を悲しみ、請ひて近郷農家の婢と爲り、少許の傭錢を得て以て父母に奉ずれども、固より養に充たず。登勢乃ち主人に乞ひて己の食を減じ、剩し得たる所を以て毎夜父母に捧ぐ。黎明より終日主家の勞役に服し、家に歸れば則ち終夜枕頭に侍し、未だ曾て一日も懈らず。郷俗時時奴婢を放ちて恣に休息せしむ。之を日待と曰ふ。登勢此の日には必ず家に歸りて終日父母を慰むるを以て

樂とす。人あり、謂て曰く、汝主家に在れば寝ぬるに重衾あるも、家に歸れば弊蓆も猶身を蔽はず。何を以て歸るを樂しむやと。答へて曰く、吾唯父母の疾を憂ふるのみ。煖衾と弊蓆とは問ふ所にあらずと。前の養父吉兵衞登勢が艱苦を視るに忍びず、頻りに復歸を勸むれども應ぜず。曰く、撫育鞠養茲に幾春秋、恩義所生の父母に勝る。今之を棄てゝ去らば、誰か病親に侍らん。妾豈海嶽の恩に背くに忍びんやと、言訖りて潸然として泣く。生母再嫁して四日市に在り、亦頻りに歸るを促すと雖も、毫も意を動かさず。奉養愈、厚し、深更人の寝ぬるを待ちて、河畔に父母の膿血に汚れたる衣裳を濯ぎ、寒時には薪を拾ひ、焚いて煖を取らしむ。斯の如きもの三年一日の如し。傳藏夫妻夙に熊野溫泉の效あるを聞き、一日竊に相携へて家を出づ。蓋し登勢の諫止せんことを恐れてなり。登勢夜に入り、始めて之を覺り、驚き馳せ、追ひて松阪に及ぶ。泣いて請ひて俱に行く。乃ち食を門戸に乞ひ、露宿風餐月を踰えて紀伊に入る。路八鬼山の險に遭ふ。而して父母竝に困頓、雙脚腐腫し、膿血滴りて、復、歩を進むる能はず。三人相擁して泣く。登勢奮然父母を勵まして曰く、「請ふ往け」と。乃ち遞次之を負ひて險を陟り、備に艱苦を嘗む。路人見るに忍びず。皆面を背けて過ぐ。斯の如き數旬纔に熊野に到る。乃ち澡浴之を久しうすれども癒えず、去りて西國の靈場を巡拜し、半歳にして歸る。然れども村人の視るを厭はんことを恐れ、夫妻竊に謀りて善光寺に賽し、路上に斃死せんことを期す。一夜復告げずして出づ、明日登勢之を覺り、追ひて別保村に至れば、二人痢疾に罹りて困倒せるに遇ふ。之を見て慟哭地に倒る。乃ち看護すること數日、强請して復俱に行く。木曾の險を過ぎ、具に艱辛を嘗む。善光寺に賽して途に溫泉に浴し、再び鄕里に歸る。文化五年津藩主藤堂高兌其の孝を聞き、米二十俵を賜ひて之を賞恤す。一日鷹を放ちて連部村に至り、召見して手づから金員を賜ひ、侍醫をして父母の疾を診察せしめ、且田一段一畝二十五歩を與へ、永く租賦を免じ、其の孝を旌表す。遠近相傳へて、金穀を贈る

もの多し。幾ならずして傳藏死す。登勢夫を迎へて家を繼ぐ、後數年にして母亦死す。其の父母の喪に丁りて、哀毀慟哭人をして惻然たらしむ。高猷封を襲ぐに及び、又數ゝ賑恤する所あり。天保十一年七月十三日病みて死す。年五十三。明治二十五年有志、碑を津公園に建てゝ其の篤孝を表彰す。（先賢遺芳）

久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな　菅原道眞母

惜しからぬ命ながらもたらちねのある世はかくてあるよしもがな　小澤蘆庵

荒木田麗の文並に歌

義良親王も同じごと下らせ給ふべき御定なれば、奥の軍は悉く從ひ奉る。さるは此の度みこは坊にゐさせ給へり。御兄の宮達も數多おはしましつるに、帝いかゞ思し召しけるにや、この御事の俄に定まり給へるもめでたき御宿世になむ。今は鄙の長路を凌がせおはしまさむ事もいとかたじけなかるべきを、國にてこそあらはさせ給はめ、道の程などは御よういあるべく仰せられて、やがて舟にて下らせ給ふべきなりとて、文月末つかた、まづ伊勢に越えさせ給ひて、其所より御舟に奉り、長月十日比、伊豆の海といふわたりを過ぎさせ給ふ程、俄に空のけしきかはりて、須磨の御祓の餘波おもほゆるばかりの嵐、おどろ〳〵しう吹き出でたるにぞ、多くの舟共は大海の浪にたゞよひて、行衛もしらずなるもあり、又こと浦

によるもありしに、みこの御舟ばかりはいかに吹き分けたるにか、もとの海によりて、篠島といふ處に著かせ給ふ。芳野殿にも事の聞えありしかば、勅使として僧正賴意をつかはされしに、歸り參りて、ことのよし奏し侍りけるついでに、

神風や御舟よすらし沖津波たのみをかけしいせの濱邊に

誠に限ある御身の、例なき鄙の御住居を、神もいかゞと思し召されて、かくはとゞめ申させたまへるにこそと、宮司共も申しあへり。其の後ぞ、また芳野に歸りいらせおはします。(池の藻屑)

荒木田麗の歌

川波の色もわかれて霞さへひましらみゆくはるの曙

こぎ出でし舟路は波のはるばると千さとをかくるこゝちこそすれ

大野志ずゑ

刀自は明治九年十月十三日三重郡楠村に生れ、長ずるに及びて同郡富田町大野作左衞門氏に嫁す。家は同地方に於ける素封家にして信望遠近に高く、作左衞門氏亦敦篤の資を以て德を郷黨に施き、老幼皆其の化に服す。

刀自資性溫良にして才氣あり。常に心を青年子女の教化に傾け、率先範を垂れ、躬行衆を率ひ、指導訓諭倦むことを知らず。明治四十四年一月富田町に處女會の組織成るや、推されて其の會長となり、家政の傍ら日夜奔走して事業の發展に努め、教化の効頗る昂る。大正十二年二月其の組織を改めて女子青年團となるや、復衆望を負ひて團長と爲り、爾來十有餘年、一意女子の教養薰陶に心を勞して今日に及べり。

由來富田町は漁業者生民の大部分を占め、風俗習慣多くは野卑に流れ、心を子女の教養に致すもの稀にして、豐漁あれば浪費濫費を恣にして、節約貯蓄することを知らず、爲に男女青年の風儀の如きも著しく亂れて、識者の等しく顰蹙を買ふこと尠からず。刀自之を歎きて、日夜訓誨甚だ力むと雖も、因襲久しきに亙りて、改過遷善の實容易に擧らず。野媼村嬢時に目を峙て、處女會に對する非難の聲を放つを耳にするに至れるも、刀自は固く心を定めて毫も意に介せず、益〻責任の重大を感じて、專ら意を處女の薫陶と一般の矯風に用ひたり。大正十二年女子青年團の組織成るや、「强くやさしく眞面目に働け」の團訓を制定して團員を率ゐ、一に國民精神作興詔書の御趣旨を奉體し、其の徹底を期する爲、或は團襷或は團手拭等を作り、團訓を染めて之を團員に配付し、團體作業時に於ては勿論、平素家庭に於ても、常に之を使用せしむることゝせり。又團員にして結婚の爲、退團する者あるときは、必ず團訓入りの袱紗を贈ることを例とす。而して團員に勤勞の實習をなさしむる爲、會合或は勤勞週間等の小閑を利用して、廢物利用による雜巾刺し、鼻緒製造等の共同作業を課するの外、大正十二年以來自宅の裏畑を提供して處女園を設け、四時絶えず花卉を栽培して、或は死亡團員の墓前に手向けては友情を厚くし、或は寺院に獻花しては祖先崇拜の念を深からしむる所多し。又團員の社會奉仕的訓練に深く意を注ぎ、共同作業によりて製造したる雜巾、鼻緒等の販賣益金を以て傘百數十本、提灯六十餘張を購入して、不時の降雨に苦しむ者の爲に、富田警察署人事相談所、富田驛、西富田驛の各構内及び富田小學校に配備したるを始め、一般通行人の便を圖る爲、街路の分岐點に花崗岩にて作りたる道路標を設置し、又團員の製作したる前鼻緒を町内各要所に吊して、道行く人の不時の用に供する等、平時に於ける社會奉仕をなす外、非常災害時に際しての活動は一層見るべきもの多く、彼の大正十二年九月關東大震災起るや、直ちに團長自

ら陣頭に立ち、團員を激勵して慰問品の募集をなし、數日ならずして現地に發送したる食料品日用品等實に數百點に達せり。

又當時來富する避難民の爲に、富田驛に救護接待所の設けらるゝや、團員を指揮して食料品、飲料水を配給し、懇切なる慰問をなし、翌年一月には震災罹災者の爲に追弔會を營みて、懇に其の靈を弔へり。其の後丹後、但馬、豆相等各地に頻發したる震災時に際しても、同じく義捐する所多く、今次の支那事變に際しては、或は應召兵士の家族慰問に、或は出征軍人の慰問金品の募集に努めて銃後を護る團員の赤誠發揮に貢獻する所尠からず。將來有爲なる主婦たらしめんが爲に、女子青年の講習、講話會を開催すること屢〻にして、其の度毎に自ら講師となるを常とせり。大正十三年三月長期夜間講習會を開催するや、連夜に亙りて熱心指導教化に努めたりしが、一夜感激興奮の餘り、聲涙共に下る熱辯を振ひつゝありし時、俄然壇上に打ち倒れて危篤に陷る。爾來家人を始め、團員の熱情による

看護を受くること半歳に及びて、漸く一命を取止めたるも、遂に半身不隨となれり。然れども毫も屈する所無く、身を杖に托して尙壯者を凌ぐ意氣を以て、益〻處女の指導强化に當りつゝあり。この悲壯なる意氣には、團員を始め、一般婦人も咸感奮して思服せざるは無く、爲に團の面目は頓に改まり、町の習俗亦面目を一新するに至れり。

刀自又常に小學校教育を重んじ、毎月一回は必ず學校を訪問し、缺席兒童ある場合は其の理由を調査して、貧困兒に對しては、陰かに其の家庭を訪問して、私財を以て學用品、食料品、衣服等を給與し、高等科の女生に對しては、放課後自家經營の工場製網手内職をなさしめ、相當の賃金を與へて出席を督勵する等、當局を援助すること尠からず。又敬老の念厚く、毎年陽春の候を卜して、七十歳以上の高齡者を自家に招待して、慰安をなすを以て例とせり。又慈善心に富みて、貧困者に金品を給與する外、感化、孤兒院等の事業に對しても、常に物質的援助

を怠らず。

刀自の家庭にあるや、夫唱婦隨よく家庭を整へて、家業の振興に努め、現に數百名を使用する大工場の經營宜しきを得、益〻繁榮を見つゝあるは、刀自內助の功に俟つ所尠からず。（三重斯民）

志摩の女

志摩の海岸は、古の日と同じやうに今日の日を迎へた。

太平洋の波は千年を一日のやうにして、遠くから青く高まりつゝ寄せて來て、海岸を形作つてゐる砦のやうな高い巖の下に白く碎ける。凄じい波の音は海の底にゐる何物かが呻くやうに起つて、空にひろがる。……また遠く寄せて來る波の音。

巖を果てとして、三方から海に圍まれ、そして海に脅されつゝも、彼方國境の連山の方に續いてゐる細長い陸――その陸は咀はれた果樹の木の實を著け得ないがやうに、千年と數へる夏にも秋にも、まだ一度も豐かな實のりを生みだせない。……石の多い、その上に點じてゐる綠の色も薄い地は、その上の空をめぐる

南國の日にも、不思議に忘れられてゐるかのやうに見える。

　そこにも小さな寺があり、寺には墓がある。寺を繞つては素朴な原始的の家がぽち／＼と立つてゐる。家のうちには男女が住んでゐて、子供もゐる。――こゝに生まれ、こゝに働いて生きてゐて、死んでしまつたものの子孫は、その祖先と同じやうに、こゝに働いて生きてゐる。こゝを外にしては、青海の彼方にも、青山の彼方にも、國といふものが無いやうにしてゐる。そして、乏しい山の幸と、乏しい海の幸に生きようとしてゐる。

　男は樵夫となつて山にはいつて行く。荒い海は幸が少く、彼等をして妻子の糧に足りるだけのものを得させない。が、比較的豐かな山の幸も、夫の齎し來るのを待つてゐるとしては、妻は安んじてゐられない。妻は夫の見棄てた海へ行つて、乏しい幸のうちからも、なほ何物かを得ようとする。

　夫のゐなくなつた草屋を後にして、志摩の女は海人として、絶壁の巖にも路を

求めて、海へとおりて行く。彼等の背には、まだ片時も母の手を離れては生きてゐられない乳呑兒が負はれてゐる。そして彼等の手には、海の幸を盛るべき籠と共に、奇怪にも一つの盥が運ばれてゐる。盥は乳呑兒の搖籠である。海の波の上に置かれるべき搖籠である。乳呑兒の守をしてゐては海にははいれない。海の底を潜つて、底深くはいつた間の乳呑兒の上が心許ない。何時誰が工夫したのか、盥が搖籠に代用された。母の海の上へと出て行くまゝに、乳呑兒は盥に入れられて引かれて、行くのであつた。――

　絶壁の上に立つて見よ。――

　海の上の日はその青さを喜ぶやうにも、その青さに饑ゑてゐるもののやうにも、搖めきつゝも、烈しく照らして來る。海は白く照つて來る日光に眼くるめくやうにきらめく。二つのものは縺れ合つて、遠く果ての無い、美しくも恐しい幻影の世界をなす。――

その海には、更によく見ると、眩しい光に消えようとしつつ、丁度そこに集つて來た海の鷗のやうにも、小さな小さな盥が浮かんで漂つてゐる。盥のなかには、頭を蔽ふものも無く、乳呑兒が入れられてゐる。その盥の側には、これを人間の顏とするには餘りにも赤黒い顏が、垂れた黒髮と共に波の上に顏を出してゐる。

つと、一つの盥に縋つて浮かんでゐた母親の姿が消える。海はかすかに白い渦を立てる。渦が消える海は、今までそこにあつた醜い物を呑み去り、拂ひ去つてしまつたやうに、淸らかに輝く。美しく恐しい幻影に歸る。――

寂とした沈默が、絶壁の上に立つて、瞰おろす我々の胸から海へとひろがる。

――乳呑兒は怖れと驚きの眼を圓くして、消え去つた母親を求める。……母親は消え去つたきり現れて來ない。一瞬か一日か、長短を絶してしまつた。時は今海の上に移りつゝある。

つと、海の底から浮かぶ魚のやうに、母親の顏が浮かんで來る。あちこちと見廻す。――手に持つてゐる鮑を見ようともせず、怪しいまでに美しく懷かしい日光を仰がうともせず、あちこちと見廻して、やゝ離れたあたりに浮かんでゐる一つの盥に眼を注ぐと、ぢつと見詰める。――喘ぐやうな息づかひと、濡れて眼を蔽はうとする黒髮を搔拂ひつゝ、ぢつと見詰める。

――見返す乳呑兒の顏、無心のやうに浮かんで來る笑、母親の顏にも同時に笑が浮かんで漂ふ。――

つと、また笑顏は波に消えて、乳呑兒の盥だけが殘る。

そこにも、こゝにも、同じやうに繰り返されてゐる現象、戯れにも似た現象。それが何時まで繰り返される現象であらう。長く遠く繰り返されて來た現象は終る時も無いかのやうに繰り返されてゐる。志摩の海と志摩の海岸と共にあるべきもののやうに繰り返されてゐる。（窪田空穗）

安乘の稚兒

志摩の果、安乘の小村、
はやて風岩をどよもし、
柳道木木を根こじて、
靈空飛ぶ斷れの細葉。

水底の泥を逆上げ、
かきにごす海の病、
そそり立つ波の大鋸、
よげとこそ船を待つらめ。

とある家に飯蒸せかへり、
男もあらず女も出で行きて、
稚兒ひとり小籠に坐り、
ほほゑみて海に對へり。

荒壁の小家一村、
反響する心と心、
稚兒ひとり恐怖を知らず、
ほほゑみて海に對へり。

いみじくも貴き景色、
今もなほ胸にぞ跳る。

少くして人と行きたる
志摩の果、安乘の小村。

（伊良子清白）

伊勢の浦にてあまの鮑取るには、乳呑子など引連れて、夫は櫂を使ひゐて、舟もやひするに、妻は海底に飛入り、こゝかしこ貝を求むる中に、子の乳を尋ねて、よゝと泣く聲の水底に聞ゆるにぞ、今一つ得まく思へど、子の泣く聲の聞ゆるに引かされ、浮かび出でゝ舟べりに取りつき、息もつきあへず、子に乳をそふる、その有様哀にして、げに惻隱の心も發動すべし。

雲萍雜志

雙殉行

戰雲壓城城欲壞。腹背受敵我軍敗。
聯隊旗兮臣所掌。爲賊所奪臣罪大。
旅順巨礮千雷轟。骨碎肉飛血雨腥。
二萬子弟爲吾死。吾何面目見父兄。
青山馳道連朱闕。萬國衣冠儼成列。
靈輿肅肅牛步遲。金輪徐輾聲如咽。
弔礮一響臣事終。刺腹絕喉何從容。
旁有蛾眉端坐伏。白刃三刺纖手紅。
遺書固封墨痕濕。責躬誡世情尤急。

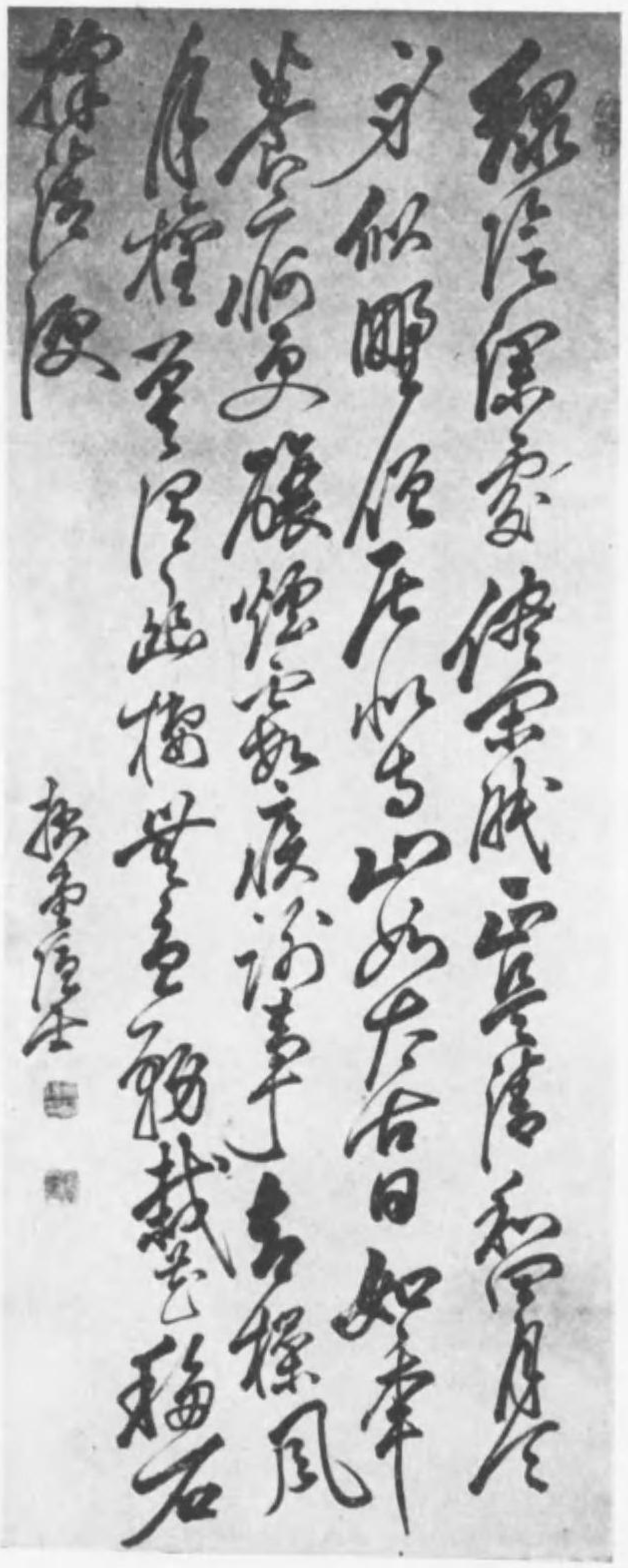
雙殉行

言言都自熱腸迸。　鬼哭神慟天亦泣。」
嗚呼以身殉君臣節堅。　舍生從夫婦道全。
忠魂貞靈長不散。　千秋萬古侍桃山。』

（竹添井井）

見るにつけ聞くにつけてもたゞ君のまごゝろのみぞしのばれにける

東郷平八郎



齋藤拙堂の筆蹟

梅溪游記

一

一目千本、尾山八谷之一也。花最饒。故有此名。蓋比芳野櫻谷云。余與同人、出三學院、下前崖、覽山水與梅花皆已佳絕。任意而行、至一大谷、文稼識而言之。徑詰曲而上、花夾之。步出其間、如躡白雲而行。數百步達巓。下顧彌望皜然、與溪山相輝映。余嘗遊芳野、觀其一目千本。有此盛而無此勝。又嘗觀嵐山櫻花、有此勝而無此盛也。更求之西土、以梅花名者、杭之孤山、境蓋幽、花則寥寥。蘇之鄧尉、花頗多、地則熱鬧。唯羅浮梅花村、對峻峰、臨寒溪、而花尤饒。庶幾可比我梅溪歟。日已斂昏。花隱淡烟、

中、千樹依約、不見其所極。暗香蓊勃襲人、聞溪聲益近且大。至咫尺不辨色、而後去。

二

昏黑、還入院。欲俟月升復出觀花也。余平生想梅溪月夜之奇、欲一游併之。毎歳春、有人自伊來者、輒詢之。花之開謝、與月之虧盈、毎齟齬不相合。遲之七八年、至於今歳。欲以今月望前來。然以地在山中、著花殊晚。其盛開常在春分前數日。而春分在今月之末。如其無月何。忽思邵康節詩云、賞花愼勿至離披。私謂及半開則可。何待其爛漫。遂以望後三日來。豈意花開已七八分、或將十分。實望外之喜也。獨奈日已落、黑雲覆天。意殊悵悵。張燭欲飲。此行購樽容五升者、滿貯酒、命奴負荷。呼取之、酌不數巡而竭。怪詰之、乃知奴醉墜地、致傾覆。益悵恨。買村酒、得

數升來。洗盞更酌。雖甜不適口、亦自醺然。文稼風流士、公圖以詩名海內。而半香善畫山水。餘人亦皆吟咏揮灑、少慰愁悶。俄而小奚來報曰、雲破月出矣。衆驚喜、欲狂。捨盞走出。時將二更、月色清朗。步抵眞福寺、枝枝帶月。玲瓏透徹、影盡橫斜。寶鈿玉釵、錯落滿地。水流其下、鏘然有聲。覺非人境。傍岸西行。前望月瀨、水清如寒玉、漾月影、蹙作銀鱗。而兩山之花、倒蘸其上、隱約可見。一棹中流、山水俱動。吾平生之願、至是酬矣。

（齋藤拙堂）

昭和十四年七月一日印刷
昭和十四年七月五日發行

版權所有

三重婦女讀本

三重婦女讀本
定價 金七拾錢
送料金拾八錢

編者 社團法人 三重縣教育會

發行者 社團法人 三重縣教育會
三重縣津市大字塔世矢下四七〇ノ一

印刷者 山村淺次郎
三重縣津市釜屋町

印刷所 山村活版所
三重縣津市釜屋町

發賣所 社團法人 三重縣教育會
三重縣津市大字塔世矢下四七〇ノ一

395
277

終